

北海道立埋蔵文化財センター

年報17

平成27(2015)年度

北海道立埋蔵文化財センター

年報17

平成27(2015)年度



▲岩内町東山1 遺跡調査状況 (南→)



▲湧別町シブノツナイ 竪穴群 (北東→)

目 次

I	施設の概要	
1	設置の目的	1
2	沿 革	1
3	施設の概要	1
	(1) 工 期	
	(2) 面 積	
	(3) 組 織 図	
	(4) 職員名簿	
II	調査研究事業	
1	重要遺跡確認調査	2
	(1) 岩内町東山1遺跡の調査	
	(2) 湧別町シブノツナイ竪穴住居群の調査	
2	埋蔵文化財に関する調査研究	3
	(1) 保管出土品を活用した研究	
	(2) 研修・情報収集	
	a 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会	
	b 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第2回役員会	
	c 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第28回研修会	
	d 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議	
	e 第6回文化財写真技術研究会	
	f 文化財保存修復学会第37回大会	
3	分析・鑑定・保存処理等	8
	(1) 分析・鑑定	
	(2) 保存処理	
4	市町村教育委員会支援	9
	(1) 指導・協力等	
	(2) 出前研修会	
	(3) 埋蔵文化財担当職員研修会	
III	収蔵・保管事業	
1	収蔵資料	11
2	図書資料	14
	(1) 購入図書一覧	
	(2) 受領刊行物一覧	
IV	普及・啓発事業	
1	展示公開	20
	(1) 常設展示「掘り出された北の歴史」	
	(2) 企画展示	
	a 北の縄文—縄文探訪と縄文工房—展	
	b 北海道遺跡百選 8 縄文アクセサリーコレクション2015 恵庭市西島松遺跡群と副葬品 展	
	c 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成26年度発掘調査成果展	
	d 世界遺産をめざす北の縄文展	

2	資料の特別利用等	24
	(1) 特別利用	
	(2) 模写品等の刊行等の承認	
	(3) 資料の貸出承認	
3	講座等の開催	27
	(1) 一般道民対象の講座	
	a ガラス玉づくり入門	
	b 発掘調査入門(1)	
	c 発掘調査入門(2)	
	d 石器づくり入門	
	e 埋文センター発掘物語 遠軽町白滝遺跡群の調査	
	(2) 児童生徒学生対象の体験型講座	
	a 親子ガラス玉づくり教室	
	b 夏休み自由研究教室 まいぶん遺跡探検隊 (第1次)	
	c 夏休み自由研究教室 まいぶん遺跡探検隊 (第2次)	
	d 冬の縄文生活体験ひろば	
	e 冬休み自由研究教室 まいぶん遺跡探検隊 (第3次)	
	f 冬休み自由研究教室 まいぶん遺跡探検隊 (第4次)	
	(3) 児童生徒対象の出前講座	
	a 事業目的	
	b 事業内容	
	(4) 教育連携講座	
	(5) 一般道民対象の講演会	
	a 夏季講演会 DNAからみたヒグマの系譜—考古学と分子系統学のコラボレーション (増田隆一 氏)	
	b 秋季講演会 考古学と文献史学—新しい関係構築をめざして (桜井英治 氏)	
	(6) 近隣市町村等対象の出前講座	
	(7) 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター平成26年度発掘調査報告会	
4	協力	30
	(1) 北海道文化財保護協会「子どもの文化財愛護推進事業」	
	(2) 講師派遣	
	(3) 職場体験	
	(4) インターンシップ	
	(5) 博物館実習	
5	周辺施設・大学との連携	31
	(1) 文京台地区道立教育3施設連携	
	(2) かるちやるnet	
	a てくてく、ぺったん! かるちやる スタンプラリー	
	b 発見・体験 文化の秋—遊ぼう!学ぼう!あつべつ・えべつ—	
	c かるちやるガーデン2015	
	(3) のっぼろ11ネット	
6	利用状況	33
	(1) 入館者数一覧	
	(2) 団体利用者対応	
7	講演会要旨	38
	(1) 夏季講演会 DNAからみたヒグマの系譜—世界に発信! 考古学と分子系統学のコラボレーション (増田隆一 氏)	
	(2) 秋季講演会 考古学と文献史学—新しい関係構築をめざして— (桜井英治 氏)	

I 施設の概要

1 設置の目的

北海道には貴重な埋蔵文化財が数多く発見されており、これらの埋蔵文化財の保護、保存・活用を図るため、調査研究を行なうとともに、出土文化財等の収蔵保管、展示公開並びに文化財保護思想の普及啓発を図る総合的な機能を有する道立の埋蔵文化財センターを設置する。

2 沿革

平成7年

3月 北海道立埋蔵文化財センター（仮称）基本構想策定

平成8年

9月 本館基本設計完了

平成9年

3月 本館実施設計完了

10月 本館建設工事着手

12月 別館（整理作業所）基本設計完了

平成10年

3月 別館（整理作業所）実施設計完了

9月 別館（整理作業所）建設工事着工

平成11年

3月 本館建設工事竣工

4月 北海道立埋蔵文化財センター開設

8月 別館（整理作業所）建設工事竣工

11月 一般公開

3 施設の概要

(1) 工期

[本館工事] 平成9年10月31日着工

平成11年3月18日竣工

[別館工事] 平成10年9月10日着工

平成11年8月18日竣工

[外構工事] 平成11年7月28日着工

平成11年12月10日竣工

(2) 面積

[敷地面積] 18,599.50㎡

[延床面積]

本館：5,063.02㎡（鉄筋コンクリート造・2階建）

別館：2,081.80㎡（鉄筋造・3階建；整理作業所）（渡り廊下含む）

[部屋別面積]

本館1階

調査研究室（253㎡）

保存処理室（167㎡）

観測・計測室・修復室（47㎡）

金属製品処理室（31㎡）

分析室（48㎡）

実験室（53㎡）

撮影室・暗室（105㎡）

図書室（177㎡）

一般収蔵庫（399㎡）

展示収蔵庫（321㎡）

展示室（310㎡）

本館2階

所長室（47㎡）

事務室（241㎡）

特別収蔵庫（227㎡）

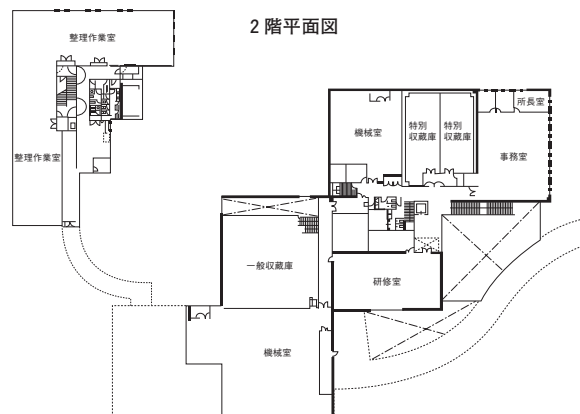
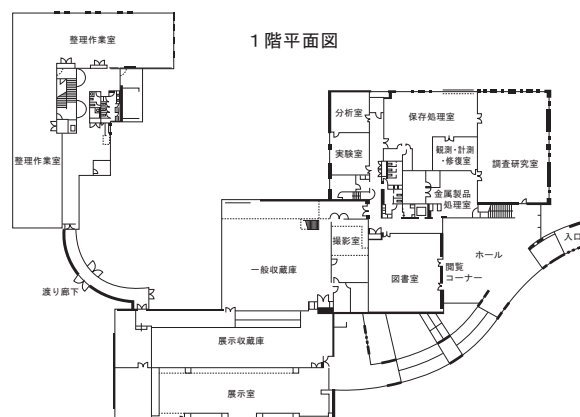
研修室（196㎡）

一般収蔵庫（319㎡）

別館1階：整理作業室（520㎡）

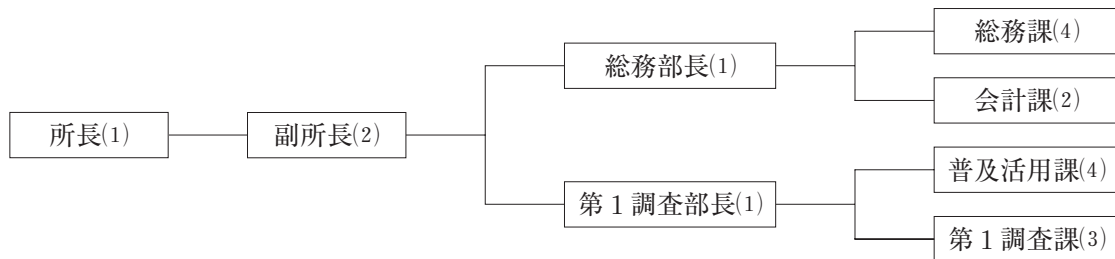
別館2階：整理作業室（540㎡）

別館3階：整理作業室（220㎡）





(3) 組織図



(4) 職員名簿

職名	氏名	職名	氏名	職名	氏名
所長	越田賢一郎	総務部長	和田 基興	第1調査部長	長沼 孝
副所長	中田 仁	総務課長	葛西 宏昭	普及活用課長	鎌田 望
副所長	*山田 寿雄	総務課主査	小杉 充	普及活用課主査	倉橋 直孝
		総務課参与	前田 博	普及活用課主査	藤井 浩
		総務課参与	作田 千秋	普及活用課主任	藤本 昌子
		会計課長	礪田 千秋	第1調査課長	田口 尚
		会計課主査	中村 貴志	第1調査課主査	柳瀬 由佳
				第1調査課主査	吉田裕吏洋

*平成27年 6月26日から

II 調査研究事業

1 重要遺跡確認調査

年度当初に平成26～29年度重要遺跡確認調査実施要領が通知され、今年度は岩内町東山1遺跡と湧別町シブノツナイ竪穴住居群を調査対象とすることとなった。岩内町東山1遺跡については発掘調査を主とした調査が最優先であること、湧別町シブノツナイ竪穴住居群については次年度調査のための準備および資料収集を行うこととなった。26年度より、調査成果を報告する重要遺跡確認調査報告書については、年度ごとに刊行する年次報告となったため、ここでは概略のみ記述する。

(1) 岩内町東山1遺跡の調査

7月23日(木)～8月7日(金)に、道指定史跡範囲3,171.2㎡、「第2地点地区」565.32㎡のうち60㎡をテストピットとトレンチにより調査した。遺構は盛土遺構1か所と土坑を6基検出した。遺物は縄文時代前期後半～中期前半の土器、扁平打製石器、北海道式石冠、石皿などの石器あわせて8箱(59cm×39cm×15cmのコンテナ)出土した。また、12月18日(金)に岩内町郷土資料館にて資料調査を行い、資料を借用した。

(2) 湧別町シブノツナイ竪穴住居群の調査

10月1日(木)～10月9日(金)に、史跡指定範囲139,486㎡を対象に測量及び写真撮影による現況把握並びに竪穴群の詳細観察を行った。竪穴は435か所確認し、そのうち139か所の詳細測量を終えた。

2 埋蔵文化財に関する調査研究

(1) 保管出土品を活用した研究

【今年度研究概要】

指定管理第3期においては下記の3つの課題を中心に保管出土品を活用した調査研究を進めてきたが、今年度も同様に行った。

1. 保管遺物を対象にした科学的分析で、主に材質分析を行うこと。

2. 保管遺物を対象にした遺物と遺構との関係を整理すること。

3. 保管遺物を活用して、新たな体験学習教材または体験学習内容及び方法を開発すること。

1については、昨年度に続いて札幌学院大学大塚宜明講師、明治大学黒曜石研究センターの協力を得て、千歳市オサツ16遺跡出土の旧石器時代黒曜石製石器の分析を行った。今回、大塚氏から分析結果に係るオサツ16遺跡の資料についての情報提供があったので下記に掲載し紹介する。今後の分析に係る重要な視点の一つとしてとらえておきたい。

2については遺構と遺物の関係を重視した特別展示、北海道遺跡百選8 恵庭市西島松遺跡群縄文アクセサリコレクション2016を行った。遺構出土の遺物とその出土状況との関わりについて次年度に報告の予定である。

3については今年度も小学校の授業での遺物利用など、保管遺物を活用した体験学習が数多く行われた。今回はこのような事例を整理することに努めた。新たな教材作成に向けて示唆深い事例が含まれるため、さらに整理の上次年度に報告する。

【オサツ16遺跡出土資料の分析】

石器の傷が示す人類の運搬痕跡

—オサツ16遺跡を対象に—

大塚 宜明（札幌学院大学）

1. 本研究の目的

石器を詳細に観察すると、石器を製作した時の加工痕や、使用した時に生じる使用痕（刃こぼれ）など、さまざまな痕跡を読みとることができる。近年、黒曜石製石器の表面に残る傷を分析することで、加工痕や使用痕とは異なる運搬時に生じる痕跡（運搬痕）が新たに見い出され、当時の石材資源の利用やその運搬のあり方について議論がなされている（岩崎2004、山田2006、御堂島2010など）。

本論では、旧石器時代終末期のオシヨロッコ型細石刃核を有する石器群を対象に、黒曜石製石器

の表面状態を分析し、その結果を報告するとともに、当時の運搬のあり方について予察する。

2. 対象遺跡の概要

オサツ16遺跡は千歳市上長都382-314に所在する、旧石器時代～縄文時代晩期の複合遺跡である（北海道文化財保護協会1997）。北海道中央部の石狩低地帯南部に位置し、千歳川と漁川によってはさまれた長都台地上に立地する。

オサツ16遺跡には、A地区・B地区・C地区・D地区の4つの調査区があり、A区・B区から旧石器時代の石器群が確認されている。本論が対象とするB地区のブロック1では、東西に18m、南北に11.5mの楕円形状に遺物が出土した。石器組成は、細石刃核120点、細石刃1,018点、石刃404点、尖頭器2点、両面調整石器4点、彫器136点、搔器174点、削器82点、錐13点、抉入石器8点、複合石器13点、R・F1・U・F1 23点、スポール276点、剥片・碎片29,961点、石核3点、台石1点の計32,266点である。

石器石材は、黒曜石、硬質頁岩、メノウ、安山岩、砂岩などで構成される。オサツ16遺跡の付近には黒曜石原産地はなく、北海道の四大黒曜石原産地である、白滝から直線距離で150km、置戸から170km、十勝から120km、最も近接する赤井川からも50kmをはかる（図1）ものの、黒曜石が剥片石器の主体を占める。

3. 分析資料と分析方法

オサツ16遺跡B地区ブロック1では、黒曜石製資料が多数出土しているため、全てを網羅的に観察することは困難である。そのため、主要な石器である細石刃核、彫器、搔器に絞って分析を行った。本論では、紙数の都合により、分析した資料の内1点の彫器を分析事例として紹介する。

肉眼観察とルーペ（20倍）を用い、石器表面の状態を観察した。観察にあたっては、石器の素材面（背面・主要剥離面）、調整、刃部、メンテナンス時の剥離痕といった、異なる役割をもつ剥離面を単位に、傷の有無および傷のあり方に注目し詳細に観察した。

4. 分析結果

図2は黒曜石製の彫器である。肉眼観察においても、石器の素材面（背面・主要剥離面）は磨りガラス状を呈するのに対し、調整・刃部・メンテ

ナンスの剥離面には光沢があり、両者は対照的な特徴を持つ。表面の状態を拡大したのが、図2 aとbである。石器の素材面にみとめられた磨りガラス状の表面には、線状の傷がランダムにみとめられる。一方で、整形・刃付け・メンテナンスが施された光沢がある剥離面には、線状の傷はみとめられない。さらに、それらの表面にみとめられる傷と調整痕の新旧関係に注目すると、表面にみとめられる傷を上書きするように、調整が施されていることがわかる。上記した関係から、素材面の表面に傷が形成された後に、調整・刃部・メンテナンスといった石器の製作・使用・維持がおこなわれたことがわかる。

5. 石器表面の傷が示す人類活動—運搬のあり方や資源の利用—

それでは、石器表面にみとめられた傷は一体何を意味するのだろうか。ここで、原石から割りとられた直後の石器の状態を確認する(写真1)。一見して明らかなように、割りとられた直後の石器の表面には、図2の石器の素材面に観察されたランダムな線状痕をまったくみとめることができない。そして、石器の表面に観察されたランダムな線状痕は、石器の運搬時に石器や物が重なりすれ合うことで生じる可能性が指摘されている(山田2006、御堂島2010)。

前章で確認したように、運搬痕の可能性があるランダムな線状痕は、石器の素材面にのみみとめられ、道具を加工(製作)・使用・維持した際に生じる割れ面にはまったくみとめることができなかった。つまり、このことは、石器が完成した道具(完成品)としてでも原石の状態でもなく、素材剥片(素材)の状態でも遺跡に持ち込まれ、遺跡内で道具に加工・使用されたことを示している。

以上みてきたように、石器表面にみられる傷から、道具の材料となる石の運搬やそのあり方という、人類の資源利用の一端を読みとることができるのである。

引用・参考文献

- 北海道文化財保護協会 1997 『千歳市オサツ16遺跡(2)—北海道横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』
- 岩崎泰一 2004 「黒耀石石器群について」『今井三騎堂遺跡—旧石器時代編—』 pp. 467-476, 群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 山田しょう 2006 「西山遺跡(第二東名No.2地点)第Ⅱ文化層の石器の使用痕と表面状態の分析」『西山遺跡(第二東名No.2地点)』 pp. 128-160, 静岡県埋蔵文化財研究所
- 御堂島 正 2010 「石器の運搬痕跡」『比較考古学の新地平』 pp. 23-34, 同成社



図1 オサツ16遺跡と四大黒耀石原産地の位置関係

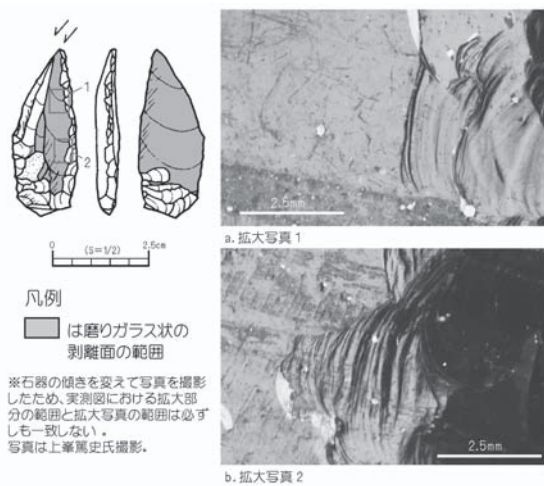


図2 分析資料と傷のあり方

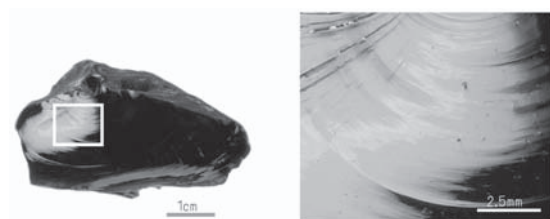


写真1 剥離直後の剥片の表面状態

(2) 研修・情報収集

a 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会総会

期 日：5月28日（木）～5月29日（金）

会 場：秋田県秋田市中通1-3-5

秋田キャッスルホテル 放光の間

参加者：所 長 坂本 均

総務課参与 作田千秋

内 容

28日（木）は、秋田キャッスルホテルで総会・講演、29日（金）は、県内の史跡伊勢堂岱遺跡等の視察を行った。

〈議 事〉

①会員の入退会の状況について

様々な機会をとおし、入会を働きかけているが、現在昨年同様の構成団体数の報告があった。

（加盟団体数：73団体）

②平成26年度事業報告について

事務局（榎原考古学研究所）から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行、文化庁への要望活動、発掘された日本列島展への協力について報告があり、その内容について了承した。

平成27年度の要望事項については、「埋蔵文化財発掘調査体制等の今後の方向性の明示とその堅持に向けた基盤整備」、「地域に根ざした埋蔵文化財活用事業にかかる調査・研究への国庫補助事業の創設」を要望事項とすることについて了承した。

③平成26年度収支決算について

事務局から説明・報告があり了承した。

④監査報告について

監事の中鉢氏（静岡県埋蔵文化財センター）から監査結果の報告があり了承した。

⑤新規加盟機関の勧誘について

事務局から新規加盟組織の勧誘について、今後とも対応する旨説明があり了承した。

⑥発掘された日本列島2015展について

事務局から事業概要の説明・報告があり了承した。

⑦平成27年度事業計画（案）について

事務局から総会・研修会・役員会の開催、機関誌の発行について説明・報告があり了承した。

⑧平成27年度収支予算（案）について

事務局から説明・報告があり了承した。

⑨平成28年度総会及び研修会開催地について

事務局から、幹事機関の奈良市埋蔵文化財調査センターに対して、第2回役員会までに決定願

たい旨、依頼があった。

〈講 演〉

「埋蔵文化財保護行政の現状と課題」

禰宜田佳男 氏

（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）

東日本大震災の復旧・復興事業と埋蔵文化財の取扱いについて、引き続き両立させて推進願いたいこと。事業量の推移に対応した予算の確保に向けて、対応を検討したいこと。専門職員数の今後の減少推移の懸念、新規採用者の取組み期待や今後の文化財発掘調査体制の在り方等についての講演をされた。

〈特別講演〉

「世界史のなかの縄文文化」

菊池徹夫 氏（早稲田大学名誉教授・現福島県文化財センター白河「まほろん」館長）

世界の中で独自発展を遂げた縄文文化についての講演をされた。

〈視 察〉

8：00 秋田キャッスルホテル前 出発

10：00 史跡 伊勢堂岱遺跡（北秋田市）

13：00 特別史跡 大湯環状列石（鹿角市）

15：30 盛岡駅解散

b 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第2回役員会

期 日：11月20日（金）

会 場：東京都千代田区平河町2-6-3

参加者：副所長 山田寿雄

〈議 事〉

1 協議事項

①平成28・29年度の役員について

事務局（青森県立埋蔵文化財センター）から、28年度は改選なく現役員が継続、29・30年度の役員候補は28年度の第2回役員会に各ブロックから推薦いただくので調整願いたいとの説明があり了承した。

②平成28・29年度総会・役員会・研修会について
事務局から、以下の説明があり了承した。

平成28年度

総会・第1回役員会は幹事・会場とも宮崎県（5月下旬）、第2回役員会は幹事青森県、会場東京都（11月下旬）。研修会は奈良県立榎原考古学研究所（10月20・21日）。

平成29年度

総会・第1回役員会は幹事・会場とも静岡県、

第2回役員会は幹事北海道・東北ブロック会長県、会場東京都、研修会は青森県。

③協議会設立30周年（平成29年）について

事務局から、28年度総会で提案できるよう、アンケートを送付するので各幹事において意見集約願いたいとの提案があり了承した。

④平成28年度の文化庁への要望活動について

事務局から、アンケートを送付するので各幹事において意見集約願いたいとの提案があり了承した。

⑤会員の入退会について

事務局から、長崎県埋蔵文化財センターと大分県臼杵市埋蔵文化財センターに資料送付し、長崎県は入会申請準備中との報告あり了承した。

2 報告事項

①平成27年度文化庁への要望活動

10月2日、全埋協と合同実施（会長、副会長）したと報告された。

②会報の発行状況と発行予定

54号近日発行、55号3月発行予定と報告された。

③会費の執行状況

3 情報交換事項

平成26, 12, 25付け文化庁通知による影響及び補助金削減に伴う影響について。

c 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第28回研修会

期 日：11月26日（木）～11月27日（金）

会 場：岡山県岡山市北区下石井2-6-41

公立学校共済組合岡山宿泊所

ピュアリティまきび

参加者：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩
内 容

「古代山城と城柵調査の現状」がテーマである。11月26日（木）に研修会、27日（金）に視察見学が行われた。

研修会では特別講演と、事例報告が3件あった。特別講演では「古代山城を考える－遺構と遺物－」と題して、岡山理科大学 亀田修一教授から、古代山城についての概要、調査事例の紹介と、出土遺構と遺物の組み合わせを重視した研究の成果が披露された。

これまで文献史料との照合に重点が置かれていた古代山城の研究から、最近の調査で出土した遺構、遺物の組み合わせ、特に倉庫跡などの内部施設の状況を重視する方向性について強調された。

事例報告では、岡山県鬼ノ城、高松市屋嶋城跡、

東北地方の城柵群の調査成果などが紹介された。

岡山県古代吉備文化財センターの尾上元総括主幹からは総社市鬼ノ城の調査成果が紹介された。特に掘立柱建物跡、礎石建物、鍛冶工房など城内の内部施設について報告があり、城の性格がより具体的になりつつある状況を知ることができた。

高松市創造都市推進局文化財課渡邊誠主査からは屋嶋城跡の調査成果が紹介された。特に城壁構築技術について詳細な観察が報告された。

東北歴史博物館 古川一明学芸部長からは東北地方全域の城柵調査の現状と古代山城と城柵との関連について紹介があった。

視察見学は、総社市教育委員会 松尾洋平氏の案内で総社市鬼ノ城を歩いた。鬼ノ城は総社市北部の国指定史跡鬼城山内にあり、桃太郎伝説由来の地となっている。城は山頂に築かれ、8・9合目を延々2.8キロに及ぶ城壁（土塁、石垣）がめぐっている。城門が4か所、角楼が1か所。城内は約30ヘクタール、石が敷き詰められた形跡もある。史跡整備により、今は西門と角楼が復元されている。踏査は前半に石垣と土塁によって築かれた城壁を巡った。第0水門、第1、第2水門などの遺構を見学した。後半は復元整備された西門と角楼を中心に復元整備作業の課題、問題点などについて説明を受けた。

d 平成27年度全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会北海道・東北ブロック会議

期 日：11月18日（水）～11月19日（木）

会 場：青森県八戸市大字是川字横山

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館ほか
参加者：総務部長 和田基興

内 容

八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館が開催機関となり、加盟13機関中10機関22名が参加した。

〈議 事〉

1 協議事項

①平成29・30年度北海道・東北ブロック幹事機関の選出について

北海道地区は現幹事の北海道立埋蔵文化財センターから札幌市埋蔵文化財センターを推薦し、同センターが了承した。また、東北地区は現幹事の青森県埋蔵文化財調査センター（現全国協議会会長機関）が自薦した。推薦のあった両機関を次期幹事候補機関として推薦することを全会一致で決定した。

②平成28年度北海道・東北ブロック会議開催機関について

議長である八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館から、先に決定されている輪番表に従い、札幌市埋蔵文化財センターとしたい旨の提案があり、当該機関も開催を了承したので、全会一致で決定した。

2 照会事項

続いて、各機関から照会のあった事項について、照会機関からの趣旨説明の後、各参加機関の事例紹介など活発な意見交換が行われた。

①施設等の入館者の推移と事業内容について

北海道から照会趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。メディアの有効活用などの事例が報告された。

②史跡の保存管理計画の策定について

照会機関の釧路市埋蔵文化財調査センターを代行して事務局から照会趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。東北地区では複数市町村にまたがる策定事例の報告はなかった。

③派遣労働者の活用について

青森県から照会趣旨説明の後、各機関の現状について報告・意見交換が行われた。すべての機関で派遣労働者の活用実績はなかったが、一機関で類似のケースがあった。当該機関からは、作業員が欠けてもすぐ補充される、賃金・熟練度の違いはあるとしても作業効率が低下することはないとの発言があった。他の機関からは、費用負担が増えると事業者の理解が得られない、経験者が派遣されるか不透明であるなどデメリットについての発言があった。

④作業員の通勤手当、有給休暇取得日分の賃金補助対象外に係る対応について

秋田県埋蔵文化財センターから照会趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われ、市費単独措置や日々雇用に切り換えた事例などが報告された。

⑤写真資料の電子データ化について

滝沢市埋蔵文化財センターから照会趣旨説明の後、各機関の現状について報告・意見交換が行われ、国庫補助事業を活用している事例などが報告された。

⑥発掘調査事業の管理について

八戸市から照会趣旨説明の後、年度当初における年間発掘調査事業量の考え方などに関し、各機

関の現状について報告、意見交換が行われた。

⑦労働安全衛生教育の実施状況及び⑧考古学教育の取り組み事例について

八戸市から照会趣旨説明の後、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。

⑨調査結果に関する情報発信について

八戸市から照会趣旨の説明の後、調査報告会・展示・イベントなど情報発信や広報面での工夫に関し、各機関の現状について報告、意見交換が行われた。

〈視 察〉

11月18日（水）の全体会議の終了後、八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館の視察が行われた。19日（木）は中居遺跡・記念碑・縄文館分館並びに八戸市博物館及び史跡根城の広場において、市の担当者からそれぞれ説明を受けながら視察が行われた。

e 第6回文化財写真技術研究会

期 日：7月10日（金）～7月11日（土）

会 場：奈良県奈良市二条町2-9-1

奈良文化財研究所 平城宮跡資料館 講堂
参加者：第1調査部第1調査課 主査 吉田裕史洋
7月10日（金）

「日本写真史のなかの文化財 記録と表現のかたち」

鳥原 学 氏（写真評論家）

日本写真史における文化財写真の位置づけとして、江戸期から現在にいたる写真の歴史と、文化財写真の関わりについて述べられた。

写真とは記録と解釈を封じ込めるもので、記録を伝達する手段である。写真が得意なこと不得意なことを理解することが大切である。また、写真資料は公開することが大切で、公開と活用を考えた撮影に留意することの大切さについて述べられた。

7月11日（土）

「銀塩フィルムとデジタル化に関するアンケート調査について」

勝原 潤 氏（富士フィルム イメージングシステムズ株式会社）

アンケート結果とそこから見る分析と考察について発表された。現状では全体の73%の施設でデジタルカメラの撮影比率が51%以上に増加しているが今なお70%近くの施設で銀塩フィルムの使用があること。フィルムのデジタルライズは全体の60%が未実施、デジタル画像の保存検索システム

も80%が未導入という結果から、本格的なデジタル化には至っていない現状について述べられた。

「特集「写真による記録・保存」趣旨説明」

栗山雅夫 氏（奈良文化財研究所）

写真そのものが重要文化財に指定される時代に入り、あらためて写真による記録保存について考える時期であると述べられた。

「発掘調査における写真記録と保存」

上垣幸徳 氏（滋賀県教育委員会）

発掘調査における写真撮影と保存の実態について、滋賀県と災害復興の派遣先であった岩手県教育委員会の事例の発表がなされた。滋賀県は銀塩カメラ、岩手県ではデジタルカメラが中心の撮影が行われており、それぞれの実状について述べられた。

「整理作業における写真記録と保存」

田邊朋宏 氏（福井市文化財センター）

整理作業における写真の活用と保存について、「遺物の再整理と台帳作成」「フィルムの整理と保存」の実務紹介がなされた。

「保存活用における写真記録と保存」

高梨清志 氏（富山県埋蔵文化財センター）

博物館における写真の活用について述べられた。特に公開活用（市民）の視点からの記録写真の重要性について述べられた。

「博物館における写真記録と保存」

藤瀬雄輔 氏（東京国立博物館）

博物館における写真撮影と保存の実態について述べられた。特に保存に関しては、専用サーバーの他にスタジオに設置してあるHDDにも保存がなされており、二重三重の保存の重要性について述べられた。

f 文化財保存修復学会第37回大会

期 日：6月27日（土）～6月28日（日）

会 場：京都府京都市左京区松ヶ崎橋上町
京都工芸繊維大学

参加者：第1調査部第1調査課 課長 田口 尚
内 容

6月27日（土）は口頭発表が5セッションに分けられ、セッションⅠ〔屋外文化財〕は3件、セッションⅡ〔製作技術1〕2件、セッションⅢ〔災害〕3件、セッションⅣ〔分析1〕3件、セッションⅤ〔分析2〕2件の計13件の発表があった。ポスターセッションはP-001～066までの66件の発表があった。口頭発表終了後に特別行事として

「京都工芸繊維大学美術工芸資料館の活動—近代美術工芸の保存と展示—」と題して美術工芸館館長の並木誠士氏の講演があった。

6月28日（日）は口頭発表が4セッションに分けられ、セッションⅥ〔修復材料〕は3件、セッションⅦ〔製作技術2〕2件、セッションⅧ〔修復技術〕3件、セッションⅨ〔保存理念〕3件の計11件の発表があった。ポスターセッションはP-067～131までの65件の発表があった。ポスター発表では津波被害の保存修復に関するもの多く見られた。

2日間の日程で興味深かったのは、O-01 ペルー、マチュピチュ遺跡の保存修復—「太陽の神殿」の劣化原因と保存修復方針—（西浦忠輝 他）である。近年地衣類の繁殖が増大し、変色等外観上の問題が生じていること、本格的な補修・補強が必要な箇所、雨水対策が急務な箇所などが報告された。しかし、全体的には、当面の危険性は無いと判断された。今後も良好状態を維持するためには方策を今から検討しておく必要があるとのこと。国際的な公的機関、民間文化財団、ペルー政府との連携と信頼関係維持が保存修復に必須条件である。その他、考古学的調査に参考となる発表題目を列挙する。O-02 土壁の劣化に関わる土と体積含水率と凍結温度の関係（石崎武志）、ヤモリテープを用いた極微量分析の可能性—輸出漆器の分析事例から—（神谷嘉美 他）、O-13 高出力大型X線CT撮影装置の文化財分野への導入と臨床保存への活用（荒木臣紀 他）、P-023 LED照明を用いた展示ケース内環境の分析（高科真紀 他）、トウキ（杯）とイタンキ（椀）との比較検討—容量に注目して—（小林幸雄 他）、P-023 虫害を受けたイユタニ（杵）の劣化診断および生物劣化に関する現況調査（杉山智昭 他）、P-048 木造彫刻に使用された釘の変遷—X線CTによる非破壊調査—（赤田昌倫 他）、P-128 低温化における砂岩製墓石の接着検討（山田卓司 他）、P-128 パイプ状ベンガラ生成方法に関する研究（李素妍 他）、P-131 土器復元材料への試み報告—愛知県犬山市青塚古墳壺形埴輪の再復元より—（岩月真由子）などがあった。

3 分析・鑑定・保存処理等

(1) 分析・鑑定

昨年度に引き続き、過年度報告試料ならびに整理・報告中の縄文時代および続縄文時代の玉類の

化学組成を測定し、石材の確認・同定を行った。今後も継続的に化学組成分析作業を行い、基礎データの収集を行う予定である。有機性遺物では、過年度報告の縄文時代～アイヌ文化期の未同定木製品の樹種同定を行い、樹種選択などの検討を行った。また、縄文時代後期～晩期の赤色漆塗櫛・腕輪の剥落細片からプレパラートを作成し、漆塗膜構造、顔料分析を行った。アイヌ文化期の漆塗椀や漆塗折敷についても、剥落細片からプレパラートを作成して、木胎、下地、塗膜構造、顔料などを分析し、製作技法を比較検討しながら産地推定の基礎データ収集に努めた。収蔵遺物以外では、市町村指導・助言に係る保存処理作業過程および重要遺跡確認調査で検出された遺物の整理・報告に関連したX線透過・材料分析、石材・樹種同定を随時、実施した。

その他、蛍光X線分析装置、電子顕微鏡など、分析同定に係る精密機器の設置環境整備と維持管理を行った。

(2) 保存処理

保存処理では、道立センター収蔵・展示中の木製品や金属製品などについて、温湿度測定とともに日々保管環境を点検している。収蔵品のうち、水漬保管遺物では、資料および容器の洗浄、水と養生材料の交換をおよそ四半期ごとに行った。処理済木製品や金属製品などの乾燥保管資料は、シリカゲル、アートソープ、脱酸素剤などの調湿剤を随時交換し、必要性に応じてフィルムパックを実施した。特に重要文化財「北海道美々8遺跡出土品」のうち、金属製品については、資料点検確認後に、シリカゲルや脱酸素剤の交換を行い、RPシステムによるフィルムパックを実施した。その他、水漬けフィルムパックの木製品については、PEG法と真空凍結乾燥法を併用した保存処理を実施し、資料の安定化と処理期間の短縮に努めた。劣化や破損が確認された金属製品については、随時、X線透視観察後、クリーニング、脱塩処理、アクリル系樹脂を減圧含浸し、修復・安定化処理を行った。

なお、機器の老朽化、減失に伴い、今後の作業計画を見直す予定である。

4 市町村教育委員会支援など

(1) 指導・協力等

①上ノ国町「町内出土遺物保存処理事業」に係る

指導・助言について(上ノ国町教育委員会) [平成27年 3/10 (火)～3/12 (木) 田口 尚 場所：北海道立埋蔵文化財センター保存科学室] 漆器及び金属製品の保存処理について(真空凍結乾燥機・X線透過撮影装置など)を使用し、指導した。

②市立函館博物館所蔵金属製品の保存処理・修復指導(市立函館博物館) [平成27年 3/13 (月)～3/16 (水) 田口 尚 場所：市立函館博物館、函館北方民族博物館] モヨロ貝塚出土品等収蔵金属製品の劣化状況を点検し、保存処理・収蔵保管について指導した。

③埋蔵文化財整理室における恒温恒湿室設置に関わる指導・助言(恵庭市教育委員会) [1回目9/7 (月)、2回目10/23 (金) 田口 尚 場所：恵庭市郷土資料館] 恒温恒湿室の新設に伴う留意点および設計等に関する指導・助言をした。

④町内出土金属製品の保存処理及び保管に係る指導・助言について(むかわ町教育委員会) [1回目10/6 (火)～継続中 田口 尚 場所：北海道立埋蔵文化財センター保存科学室・調査研究室] 町内出土上古刀等のX線透過撮影、保存処理実務を実践・研修し、具体的な応急措置や作業手順を指導・助言している。

⑤上ノ国町「町内出土遺物保存処理事業」に係る職員の派遣について(上ノ国町教育委員会) [10/26 (月)～10/28 (水) 田口 尚 場所：上之国勝山館調査整備センター] 漆器類処理後のクリーニング、接着、台座作成等、保管方法と保管管理について実践指導した。

(2) 出前研修会

「地域の埋蔵文化財—十勝を対象に—」

目的：地域の埋蔵文化財についての見識を深めるとともに、公開活用の事例として、展示収蔵施設を見学する。

講師

帯広百年記念館長 北澤 実 氏
帯広百年記念館 副館長 山原敏朗 氏
陸別町教育委員会 大鳥居 仁 氏

日時：9月3日(木)

会場：帯広百年記念館

内容

研修1

「十勝の埋蔵文化財」

(講師：北澤 実 氏)

十勝の文化財、特に埋蔵文化財の概要について



▲出前研修

研修を行った。

研修 2

「帯広市の埋蔵文化財 旧石器時代・縄文時代草創期・早期」

(講師：山原敏朗 氏)

帯広市の遺跡と出土資料、特に旧石器時代・縄文時代草創期・早期の遺跡・出土品について研修を行った。

研修 3

「史跡の調査と整備」(講師：大鳥居 仁 氏)

陸別町ユクエピラチャシ跡の史跡調査と整備について研修を行った。

研修 4

「帯広百年記念館見学」

【出前研修参加者一覧】

	氏 名	振興局	所 属
1	北澤 実	帯広百年記念館長(講師)	
2	山原 敏朗	帯広百年記念館副館長(講師)	
3	大鳥居 仁	陸別町教育委員会(講師)	
4	村椿 篤史	石狩	札幌市埋蔵文化財センター
5	長町 章弘	石狩	恵庭市教育委員会
6	鈴木 将太	石狩	恵庭市教育委員会
7	宮本 雅通	桧山	今金町教育委員会
8	吉田 清人	上川	名寄市教育委員会
9	高橋 美鈴	日高	様似市教育委員会
10	小松 芳幸	十勝	足寄町教育委員会
11	乙井 逸人	十勝	新得町教育委員会
12	車塚 洋	釧路	厚岸町教育委員会
13	前田 芳和	釧路	厚岸町教育委員会

(センター職員を除く)



▲埋蔵文化財担当職員研修会

日 程

12:55 受付・オリエンテーション

13:00 研修 1

13:40 研修 2

14:20 研修 3

15:00 休憩

15:10 研修 4

17:00 研修終了・修了式

参加者：市町村職員等13名、センター職員15名、計28名。

(3) 埋蔵文化財担当職員研修会

「骨角器分類の実際」

目的：発掘調査に携わっている市町村職員を対象に、骨角器の分類・変遷について専門的研修を行う。

講 師

国立歴史民俗博物館 名誉教授 西本豊弘 氏
(公財)北海道埋蔵文化財センター

主査 福井淳一

日 時：12月11日 (金)

会 場：北海道立埋蔵文化財センター 2階研修室

内 容

研修 1

「道内出土の骨角器について」

(講師：西本豊弘 氏)

研修 2

「道内出土の骨角器の分類、整理に関する諸問題」

(講師：福井淳一)

【埋蔵文化財担当職員研修会参加者一覧】

	氏名	振興局	所属
1	西本 豊弘	国立歴史民俗博物館名誉教授(講師)	
2	荒山 千恵	石狩	石狩市教育委員会
3	山田 央	渡島	七飯町教育委員会
4	木元 豊	渡島	木古内町教育委員会
5	大谷 茂之	渡島	八雲町教育委員会
6	嵯峨 友和	渡島	長万部町教育委員会
7	塚田 直哉	桧山	上ノ国町教育委員会
8	小川 康和	後志	余市町教育委員会
9	花田 直彦	後志	余市町教育委員会
10	斉藤 譲一	宗谷	稚内市教育委員会
11	乾 茂年	宗谷	浜頓別町教育委員会
12	高畠 孝宗	宗谷	枝幸町教育委員会
13	林 勇介	オホーツク	湧別町教育委員会
14	八重柏 誠	オホーツク	美幌町教育委員会
15	松田 功	オホーツク	斜里町教育委員会
16	平河内 毅	オホーツク	斜里町教育委員会
17	佐藤 里穂	胆振	苫小牧市教育委員会
18	菅野 修広	胆振	登別市教育委員会
19	永谷 幸人	胆振	伊達市教育委員会
20	渡邊つづり	胆振	豊浦町教育委員会
21	森岡 健治	日高	平取町教育委員会
22	川内谷 修	日高	日高町教育委員会
23	高橋 美鈴	日高	様似町教育委員会
24	車塚 洋	釧路	厚岸町教育委員会
25	猪熊 樹人	根室	根室市教育委員会
26	中田 裕香	北海道教育委員会	
27	田辺奈々瀬	札幌大学埋蔵文化財展示室	
28	新美 倫子	名古屋大学文学部	

(センター職員を除く)

日 程

10:00 受付開始
 10:20 オリエンテーション
 10:30 研修1
 12:00 昼食
 13:00 研修1
 14:00 研修2
 15:00~15:10 休憩
 15:10 研修2
 16:00~16:10 休憩
 16:10~17:00 質疑応答
 17:00 研修終了・修了式
 参加者：市町村職員等28名、センター職員23名、計51名

Ⅲ 収蔵・保管事業

1 収蔵資料

出土文化財を北海道出土文化財取扱要綱（平成13年4月11日付け教育長・出納長通知）等に則して保管し、いつでも活用できるよう管理を行い、整理作業を進めている。今年度は新たに千歳市キウス3、キウス11遺跡の資料を収蔵した。

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数		
1	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々4	5	140	1
2	道教委	1	昭和52	1977	美沢川流域の遺跡群Ⅰ	千歳市	美々5	1	1	0
3	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々4	3	152	15
4	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々5	11	74	0
5	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々6	2	13	0
6	道教委	3	昭和54	1979	美沢川流域の遺跡群Ⅲ	千歳市	美々7	7	42	0
7	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々4	6	365	108
8	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々5	3	50	5
9	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々6	2	16	3
10	北埋調報	3	昭和55	1980	美沢川流域の遺跡群Ⅳ	千歳市	美々7	1	4	3
11	北埋調報	7	昭和56	1981	美沢川流域の遺跡群Ⅴ	千歳市	美々8	1	91	117
12	北埋調報	8	昭和57	1982	美沢川流域の遺跡群Ⅵ	千歳市	美々8	1	5	9
13	北埋調報	9	昭和57	1982	ママチ遺跡	千歳市	ママチ	9	161	73
14	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々4	9	166	143
15	北埋調報	14	昭和58	1983	美沢川流域の遺跡群Ⅶ	千歳市	美々9	1	2	4
16	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々4	3	33	32
17	北埋調報	17	昭和59	1984	美沢川流域の遺跡群Ⅷ	千歳市	美々5	1	5	0
18	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々2	9	53	4
19	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々4	5	57	0
20	北埋調報	24	昭和60	1985	美沢川流域の遺跡群Ⅸ	千歳市	美々8	1	7	5
21	北埋調報	35	昭和61	1986	美沢川流域の遺跡群Ⅹ	千歳市	美々3	2	13	4
22	北埋調報	36	昭和61	1986	ママチ遺跡Ⅲ	千歳市	ママチ	8	84	75
23	北埋調報	44	昭和62	1987	美沢川流域の遺跡群ⅩⅠ	千歳市	美々8	2	42	27
24	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々3	2	39	7
25	北埋調報	62	平成1	1989	美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ	千歳市	美々8	1	42	72
26	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々3	14	134	34
27	北埋調報	69	平成2	1990	美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ	千歳市	美々8低湿部	0	0	0
28	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々3	4	10	31
29	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々7	3	14	12
30	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8	3	37	16
31	北埋調報	77	平成3	1991	美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ	千歳市	美々8低湿部	1	0	2
32	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々7	3	11	7
33	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8	2	59	72
34	北埋調報	83	平成4	1992	美沢川流域の遺跡群ⅩⅥ	千歳市	美々8低湿部	1	0	1
35	北埋調報	86	平成5	1993	ユカンボシC2遺跡	千歳市	ユカンボシC2	4	24	14
36	北埋調報	89	平成5	1993	美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ	千歳市	美々8	1	0	84
37	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	オサットー1	1	0	0
38	北埋調報	90	平成5	1993	オサットー1・キウス7遺跡	千歳市	キウス7	4	14	13
39	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス5	9	33	12
40	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	キウス7	1	5	7
41	北埋調報	92	平成6	1994	キウス5・7(2)・ケネフチ8遺跡	千歳市	ケネフチ8	1	5	0
42	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ2	4	20	117
43	北埋調報	96	平成6	1994	オサツ2・14遺跡	千歳市	オサツ14	7	31	16
44	北埋調報	100	平成7	1995	ユカンボシC9遺跡	千歳市	ユカンボシC9	3	25	33
45	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8	0	0	14
46	北埋調報	102	平成7	1995	美沢川流域の遺跡群ⅩⅧ	千歳市	美々8低湿部	2	168	10
47	北埋調報	103	平成7	1995	オサツ2遺跡(2)	千歳市	オサツ2	5	0	30
48	北埋調報	104	平成7	1995	キウス5遺跡(2)	千歳市	キウス5	9	89	18
49	北埋調報	105	平成7	1995	キウス7遺跡(3)	千歳市	キウス7	15	97	110
50	北埋調報	113	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅨ	千歳市	美々4	12	343	229
51	北埋調報	114	平成8	1996	美沢川流域の遺跡群ⅩⅩ	千歳市	美々8低湿部	1	0	0
52	北埋調報	115	平成8	1996	キウス5遺跡(3)	千歳市	キウス5	17	113	254
53	北埋調報	116	平成8	1996	キウス5遺跡(4)B・C地区	千歳市	キウス5	9	24	17
54	北埋調報	117	平成8	1996	キウス7遺跡(4)	千歳市	キウス7	8	29	0
55	北埋調報	119	平成8	1996	キウス4遺跡	千歳市	キウス4	4	37	1
56	北埋調報	124	平成9	1997	キウス4遺跡(2)	千歳市	キウス4	24	377	121
57	北埋調報	125	平成9	1997	キウス5遺跡(5)A2地区	千歳市	キウス5	11	151	159
58	北埋調報	126	平成9	1997	キウス5遺跡(6)B・C地区	千歳市	キウス5	4	46	1
59	北埋調報	127	平成9	1997	キウス7遺跡(5)	千歳市	キウス7	6	16	5
60	北埋調報	128	平成9	1997	ユカンボシC15遺跡(1)	千歳市	ユカンボシC15	3	36	81
61	北埋調報	133	平成10	1998	ユカンボシC15遺跡(2)	千歳市	ユカンボシC15	14	283	63
62	北埋調報	134	平成10	1998	キウス4遺跡(3)A H K I地区	千歳市	キウス4	42	302	234
63	北埋調報	135	平成10	1998	キウス4遺跡(4)A2地区	千歳市	キウス4	5	39	14
64	北埋調報	136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス5	1	0	0
65	北埋調報	136	平成10	1998	キウス5(7) キウス7(6)遺跡	千歳市	キウス7	1	1	0
66	北埋調報	138	平成11	1999	柏台1遺跡	千歳市	柏台1	26	22	0
67	北埋調報	144	平成11	1999	キウス4遺跡(5)	千歳市	キウス4	11	33	40
68	北埋調報	146	平成11	1999	ユカンボシC15遺跡(3)	千歳市	ユカンボシC15	1	46	14
69	北埋調報	147	平成11	1999	対雁2遺跡(1)	江別市	対雁2	2	42	14
70	北埋調報	148	平成11	1999	キウス4遺跡(6)	千歳市	キウス4	7	16	2
71	北埋調報	152	平成12	2000	キウス4遺跡(7)	千歳市	キウス4	18	109	45
72	北埋調報	157	平成12	2000	キウス4遺跡(8)	千歳市	キウス4	49	519	380
73	北埋調報	159	平成12	2000	ユカンボシC15遺跡(4)	千歳市	ユカンボシC15	1	1	3

	シリーズ名称	発行年度	報告書名	所在地	遺跡名	掲載遺物 コンテナ数	その他 コンテナ数	復元土器 個体数	
74	北埋調報 160	平成12	2000	対雁2遺跡(2)	江別市	対雁2	5	32	41
75	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー1	4	14	33
76	北埋調報 173	平成13	2001	チブニー1・チブニー2遺跡	千歳市	チブニー2	1	5	0
77	北埋調報 174	平成13	2001	ケネフチ9遺跡	千歳市	ケネフチ9	2	10	1
78	北埋調報 176	平成13	2001	ユカンボシC15遺跡(5)	千歳市	ユカンボシC15	0	0	0
79	北埋調報 177	平成13	2001	対雁2遺跡(3)	江別市	対雁2	1	6	69
80	北埋調報 178	平成14	2002	西島松5遺跡	恵庭市	西島松5	68	218	97
81	北埋調報 180	平成14	2002	キウス4遺跡(9)	千歳市	キウス4	90	1,623	696
82	北埋調報 187	平成14	2002	キウス4遺跡(10)	千歳市	キウス4	0	0	0
83	北埋調報 188	平成14	2002	オリイカ1遺跡	千歳市	オリイカ1	2	32	2
84	北埋調報 189	平成14	2002	オリイカ2遺跡	千歳市	オリイカ2	5	17	4
85	北埋調報 192	平成14	2002	ユカンボシC15遺跡(6)	千歳市	ユカンボシC15	0	59	0
86	北埋調報 193	平成14	2002	対雁2遺跡(4)	江別市	対雁2	41	81	36
87	北埋調報 194	平成15	2003	西島松5遺跡(2)	恵庭市	西島松5	7	21	19
88	北埋調報 204	平成15	2003	対雁2遺跡(5)	江別市	対雁2	3	5	11
89	北埋調報 206	平成15	2003	オリイカ1遺跡(2)	千歳市	オリイカ1	1	2	2
90	北埋調報 207	平成15	2003	チブニー2遺跡(2)	千歳市	チブニー2	2	12	12
91	北埋調報 209	平成16	2004	西島松5遺跡(3)	恵庭市	西島松5	55	455	467
92	北埋調報 215	平成16	2004	対雁2遺跡(6)	江別市	対雁2	0	1	0
93	北埋調報 221	平成17	2005	オリイカ2遺跡(2)	千歳市	オリイカ2	23	34	10
94	北埋調報 224	平成18	2006	西島松5遺跡(4)	恵庭市	西島松5	10	27	22
95	北埋調報 225	平成17	2005	チブニー2遺跡(3)	千歳市	チブニー2	31	7	27
96	北埋調報 226	平成17	2005	対雁2遺跡(7)	江別市	対雁2	16	38	41
97	北埋調報 231	平成18	2006	対雁2遺跡(8)	江別市	対雁2	33	49	429
98	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	梅川2	3	5	6
99	北埋調報 238	平成18	2006	祝梅川上田遺跡・梅川2遺跡	千歳市	祝梅川上田	5	9	4
100	北埋調報 240	平成18	2006	対雁2遺跡(9)	江別市	対雁2	13	14	22
101	北埋調報 248	平成20	2008	西島松3・5遺跡(5)	恵庭市	西島松5	33	486	140
102	北埋調報 251	平成19	2007	キウス5遺跡(8)	千歳市	キウス5	3	17	10
103	北埋調報 252	平成19	2007	キウス9遺跡	千歳市	キウス9	13	49	181
104	北埋調報 253	平成20	2008	梅川4遺跡(1)	千歳市	梅川4	8	20	51
105	北埋調報 255	平成19	2007	対雁2遺跡(10)	江別市	対雁2	1	2	4
106	北埋調報 260	平成21	2009	西島松5遺跡(6)	恵庭市	西島松5	39	53	11
107	北埋調報 265	平成21	2009	西島松2遺跡	恵庭市	西島松2	93	437	168
108	北埋調報 267	平成21	2009	オリイカ2遺跡(3)	千歳市	オリイカ2	3	6	53
109	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー7	3	10	3
110	北埋調報 268	平成21	2009	アンカリトー7・9遺跡	千歳市	アンカリトー9	8	1	0
111	北埋調報 269	平成21	2009	梅川4遺跡(2)	千歳市	梅川4	8	57	20
112	北埋調報 284	平成23	2011	キウス5遺跡(9)	千歳市	キウス5	5	22	134
113	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	祝梅川小野	31	180	81
114	北埋調報 285	平成23	2011	祝梅川小野遺跡(1)梅川1遺跡(1)	千歳市	梅川1		2	2
115	北埋調報 296	平成24	2012	対雁2遺跡(11)	江別市	対雁2	18	85	101
116	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	祝梅川小野	7	27	54
117	北埋調報 297	平成24	2012	祝梅川小野遺跡(2)梅川1遺跡(2)	千歳市	梅川1	1		3
118	北埋調報 299	平成24	2012	キウス5遺跡(10)	千歳市	キウス5	30	112	56
119	北埋調報 300	平成24	2012	祝梅川上田遺跡(2)	千歳市	祝梅川上田	5	30	13
120	北埋調報 306	平成25	2013	梅川4遺跡(3)	千歳市	梅川4	55	201	183
121	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	祝梅川小野	2	8	0
122	北埋調報 307	平成25	2013	祝梅川小野遺跡(3)梅川1遺跡(3)	千歳市	梅川1	35	108	0
123	北埋調報 323	平成27	2015	キウス3遺跡・キウス11遺跡	千歳市	キウス3遺跡	2	3	8
124	北埋調報 323	平成27	2015	キウス3遺跡・キウス11遺跡	千歳市	キウス11遺跡	13	33	36

(道教委・道埋文センター発掘調査分)					合	計	1,307	9,743	6,400
--------------------	--	--	--	--	---	---	-------	-------	-------

1	保第	2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ボンオサツ	2	1	18
2	保第	2	平成7	1995	ボンオサツ・ケネフチ5	千歳市	ケネフチ5	5	42	0
3	保第	3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ15	1	14	1
4	保第	3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ16	4	44	14
5	保第	3	平成7	1995	オサツ15・16・18	千歳市	オサツ18	1	1	0
6	保第	5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ボンオサツ	1	1	0
7	保第	5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	オサツ18	1	1	8
8	保第	5	平成8	1996	ボンオサツ(2)・オサツ18(2)・ケネフチ5(2)	千歳市	ケネフチ5	5	14	2
9	保第	6	平成8	1996	オサツ15(2)	千歳市	オサツ15	5	47	7
10	保第	7	平成8	1996	オサツ16(2)	千歳市	オサツ16	13	28	8
11	保第	8	平成9	1997	オサツ15(3)	千歳市	オサツ15	6	26	4
12	保第	9	平成9	1997	オサツ16(3)	千歳市	オサツ16	2	14	0
13	保第	10	平成9	1997	ケネフチ5(3)	千歳市	ケネフチ5	11	68	23

(保護協会発掘調査分)					合	計	57	301	85
-------------	--	--	--	--	---	---	----	-----	----

総					合	計	1,364	10,044	6,485
---	--	--	--	--	---	---	-------	--------	-------

2 図書資料

(1) 購入図書一覧

番号	書名	編著者名	出版者
1	日本発掘! ここまでわかった日本の歴史	文化庁	朝日新聞出版
2	倭人への道 人骨の謎を追って	中橋孝博	吉川弘文館
3	考古学で現代を見る	田中 琢	岩波書店
4	地図入門 (講談社選書メチエ598)	今尾恵介	講談社
5	歴史を塗り替えた 日本列島史	大塚初重	角川書店
6	発掘された日本列島2015 新発見考古速報	文化庁	共同通信社
7	日本考古学百景 戦前の絵葉書にみる遺跡と遺物	平田 健	吉川弘文館
8	遺跡の年代を測るものさしと奈文研	国立文化財機構奈良文化財研究所	クパプロ
9	なぜ、地形と地理がわかると古代史がこんなに面白くなるのか (歴史新書)	千田 稔	洋泉社
10	水中考古学 クレオパトラ宮殿から元寇船、タイタニックまで (中公新書2344)	井上たかひこ	中央公論新社
11	日本の戦争遺跡図鑑 そので、何が起こったの? 歴史を正しく知るために	戦争遺跡保存全国ネットワーク	P H P 研究所
12	はじめての日本の歴史1 日本のはじまり 旧石器時代・縄文時代・弥生時代	山本博文	小学館
13	日本の歴史1 テーマで調べるクローズアップ!	山岸良二	ポプラ社
14	動物の見える世界 仕掛絵本図鑑	ギョーム・デュブラ	創元社
15	楽しい調べ学習シリーズ 氷河時代の大研究	多田隆治	P H P 研究所
16	楽しい調べ学習シリーズ くらしに役立つ木の実際図鑑	いわさきゆうこ	P H P 研究所
17	楽しい調べ学習シリーズ 人類の進化大研究	河野礼子	P H P 研究所
18	太陽系探検 惑星とその果ての旅	イアン・グラハム、あかつかきょうこ	大日本絵画
19	メガ ビースト絶滅した獣たち (エンサイクロペディア太古の世界3)	ロバート・サブタ、M・ラインハート	大日本絵画
20	地球のひみつをさぐる 楽しいしかげがいっぱい!	クリスチアーナ・ドリオン、ビヴァリー・ヤング	大日本絵画
21	日本列島人の歴史 (岩波ジュニア新書812)	斎藤成也	岩波書店
22	地震のひみつ (学研まんが新ひみつシリーズ)	翠川三郎、瀧本浩一、吉川 豊	学研教育出版
23	ムシの考古学 増補改訂版	森 勇一	雄山閣
24	とびだす世界地図帳	アニータ・ガネリ、ステイブ・ウォーターハウス、ひろうちかおり	大日本絵画
25	災害に学ぶ 文化資源の保全と再生	木部暢子	勉誠出版
26	骨の博物館1 動物の骨	ロブ・コルソン、黒輪篤嗣	辰巳出版
27	骨の博物館2 頭の骨	カミラ・デラ・ペドイェール、黒輪篤嗣	辰巳出版
28	NHKカルチャーラジオ 科学と人間 私たちはどこから来たのか 人類700万年史	馬場悠男	N H K 出版
29	火山入門 日本誕生から破局噴火まで (NHK出版新書461)	島村英紀	N H K 出版
30	小学校社会科を教える本	大石 学、上野和彦、椿真智子	東京学芸大学出版会
31	絵でわかる日本列島の誕生	堤 之恭	講談社
32	骨が語る日本人の歴史 (ちくま新書1126)	片山一道	筑摩書房
33	地層の見方がわかるフィールド図鑑 火山・津波・地すべり・地殻変動……実際の地層や鉱物から成因・特徴がわかる 地層、岩石、鉱物、地形の観察から生きている地球の多様な営みを考える 増補版	青木正博、目代邦康	誠文堂新光社
34	歴史を変えた火山噴火 自然災害の環境史 (世界史の鏡 環境1)	石 弘之	刀水書房
35	薄片でよくわかる岩石図鑑 含まれる鉱物や組織の種類を知る	チームG	誠文堂新光社

(2) 受領刊行物一覧 (*所在地市町村コード順に掲載。平成27年1月1日~平成27年12月31日受領分。)

番号	[北海道]
	北海道立アイヌ民族文化研究センター
1	アイヌ語地名を歩く-山田秀三の地名研究から-企画展パンフレット 2014 おびら
2	北海道立アイヌ民族文化研究センター 年報 2013 (平成25年度) 開設20周年記念号
3	北海道立アイヌ民族文化研究センター 研究紀要 第21号
4	アイヌ民族文化研究センターだより No.41
5	アイヌ民族文化研究センターだより No.42
	北海道大学総合博物館
6	北海道大学総合博物館企画展示図録 美術の北大展
7	恐竜トランクキット・ガイドブック1 骨からわかる恐竜のからだ
8	北海道大学総合博物館ニュース 第30号
9	北海道大学総合博物館ニュース 第31号
10	北海道大学総合博物館ニュース 第32号
	北海道立文学館
11	平成25年度 年報
	北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
12	平成26年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗技術調査6
13	アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ49 オタサムの女 月の女神
14	アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ50 潮とともに寄り上がり 潮とともに噓せ返る
15	アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ51 リクンナイの女
	北海道大学総務企画部広報課
16	LITTERAE POPULI Vol.55 / Spring 2015
17	LITTERAE POPULI Vol.56 / Autumn 2015
	札幌市埋蔵文化財センター
18	市内遺跡発掘調査報告書7 平成26年度 調査報告書
	一般財団法人北海道開拓の村
19	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより VOL.30 (2015年春号)
20	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより VOL.31 (2015年夏号)
21	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより VOL.32 (2015年秋号)
22	野外博物館 北海道開拓の村 村民だより VOL.33 (2015年冬号)
	釧路市埋蔵文化財調査センター
23	釧路市 緑ヶ丘1遺跡・材木町3遺跡

	三笠市立博物館
24	三笠市立博物館年報 第32号 2013(平成25)年度
25	三笠市立博物館紀要 18号
	千歳市教育委員会
26	千歳市文化財調査報告書39 市内遺跡発掘調査報告書1
	有島記念館
27	有島記念館館報 VOL.14
28	ニセコ町西富遺跡・富士見遺跡の旧石器 -再整理作業報告書-
	岩内町教育委員会
29	岩内町東山1遺跡Ⅲ
	美幌博物館
30	美幌町埋蔵文化財各種開発確認調査報告書
	日高町教育委員会
31	日高町埋蔵文化財調査報告書第3輯 マウタサップ遺跡・ケノマイ2遺跡
	平取町立二風谷アイヌ文化博物館
32	2013年度 平取町立二風谷アイヌ文化博物館 年報
	ひがし大雪自然館
33	ひがし大雪自然館研究報告 第2号
	浦幌町立博物館
34	浦幌町立博物館 年報 第15号
35	浦幌町立博物館 紀要 第15号
	[青森]
	弘前大学人文学部文化財論研究室
36	越前三国湊の中近世墓標 石造物研究に基づく新たな中近世の構築(基盤研究(A)) 研究成果報告書1
	弘前大学人文学部日本考古学研究室
37	冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書4 日本の出土米Ⅱ
38	冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト研究報告書5 亀ヶ岡文化の漆工芸Ⅱ
	八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館 縄文の里 整備推進グループ
39	平成27年度 秋季企画展図録 小川原湖周辺の縄文文化
	[秋田]
	秋田県立博物館
40	秋田県立博物館研究報告 第40号
41	Museum News 秋田県立博物館ニュース No.160
	[福島]
	福島県教育庁文化財課
42	福島県文化財調査報告書 第498集 常磐自動車道遺跡調査報告 71
43	福島県文化財調査報告書 第499集 常磐自動車道遺跡調査報告 72
44	福島県文化財調査報告書 第500集 一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告1
45	福島県文化財調査報告書 第501集 一般国道115号相馬福島道路遺跡発掘調査報告2
46	福島県文化財調査報告書 第503集 東日本大震災復興関連遺跡調査報告1
	三春町歴史民俗資料館
47	三春町文化財調査報告書第34集 三春城下 近世追手門前通遺跡群F地点
	[栃木]
	公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 普及資料課
48	とちぎ発掘調査成果情報誌No.48 下野国分尼寺跡
49	とちぎ発掘調査成果情報誌No.49 頼朝塚古墳群
50	とちぎ発掘調査成果情報誌No.50 神田城南遺跡
51	とちぎ発掘調査成果情報誌No.51 薬師堂遺跡
52	とちぎ発掘調査成果情報誌No.52 くるま橋遺跡
53	とちぎ発掘調査成果情報誌No.53 北ノ内遺跡
54	とちぎ発掘調査成果情報誌No.54 市ノ塚遺跡
55	とちぎ発掘調査成果情報誌No.55 雀宮宿跡
56	とちぎ発掘調査成果情報誌No.56 野高谷薬師堂遺跡
57	埋蔵文化財センター年報 第24号(平成26年度版)
58	研究紀要 第23号
59	栃木県埋蔵文化財センターだより 2013 12月
60	栃木県埋蔵文化財センターだより 2014 3月
61	栃木県埋蔵文化財センターだより 2014 6月
62	栃木県埋蔵文化財センターだより 2014 12月
63	栃木県埋蔵文化財センターだより 2015 3月
	栃木県教育委員会
64	栃木県埋蔵文化財調査報告 第371集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報 37 平成25年度(2013)
65	栃木県埋蔵文化財調査報告 第372集 栃木県重要遺跡 現況確認調査報告書
66	栃木県埋蔵文化財調査報告 第373集 市ノ塚遺跡
67	栃木県埋蔵文化財調査報告 第374集 雀宮宿跡
68	栃木県埋蔵文化財調査報告 第375集 野高谷薬師堂遺跡
	[埼玉]
	所沢市立埋蔵文化財調査センター
69	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第63集 市内遺跡調査報告 21
70	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第64集 ハケ遺跡 -第1~7次調査- 六所脇遺跡 -第1次調査-
71	所沢市埋蔵文化財調査報告書 第65集 柳野遺跡 -第1次調査-
72	所沢市立埋蔵文化財調査センター 年報 No.20(平成25年度)
	吉見町教育委員会
73	吉見町埋蔵文化財調査報告書第14集 町内遺跡9 北下砂遺跡
	[千葉]
	習志野市教育委員会
74	藤崎3丁目南遺跡D地点 埋蔵文化財発掘調査報告書

75	谷津貝塚(58) 埋蔵文化財発掘調査報告書
	[東京]
	駿台史学会
76	駿台史学 第153号
77	駿台史学 第154号
	公益社団法人日本文化財保護協会
78	埋蔵文化財調査要覧 平成27年度
	株式会社小学館
79	小学館版学習まんがドラえもん ふしぎのヒストリー1 日本はじまる! [旧石器時代]
	株式会社文化環境研究所
80	文環研レポート34号
81	Cultivate43号 カルチベイト
	港区教育委員会
82	港区埋蔵文化財調査年報12 -平成25年度の調査-
	共和開発株式会社
83	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告57 常陸下館藩石川屋敷遺跡発掘調査報告書
84	東京都渋谷区 代官山遺跡 第1地点
	株式会社ニューサイエンス社
85	考古調査ハンドブック12 弥生土器
	港区立港郷土資料館
86	港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告 58[TM9] 長門萩藩毛利家屋敷跡遺跡発掘調査報告書
87	港区近世寺院跡遺跡調査報告書 -不時発見寺院跡遺跡の発掘調査-
88	旧白金御料地遺跡確認調査報告書 -東京都庭園美術館改修工事に伴う事前調査-
89	研究紀要17 平成26年度
	大成エンジニアリング株式会社府中事務所 埋蔵文化財調査部
90	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書36 原東遺跡第3次調査
	株式会社ミュージアムメディア研究所
91	MML JOURNAL Vol.2
	公益社団法人日本ユネスコ協会連盟教育文化事業部 世界遺産担当
92	世界遺産年報 2016 (No.21)
	(株)バスコ 文化財センター
93	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書29 上粕屋・秋山上遺跡
94	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書33 上粕屋・鳥居崎遺跡第2次調査
	[神奈川]
	神奈川県教育委員会教育局生涯学習部文化遺産課
95	神奈川県埋蔵文化財調査報告 60
96	平成26年度かながわの遺跡展・巡回展展示図録 発掘された御仏と仏具
97	神奈川県埋蔵文化財センター年報 26 2013(平成25)年度
	株式会社玉川文化財研究所
98	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書20 神成松遺跡第4地点
99	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書28 山王B遺跡第13地点
100	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書30 神成松遺跡第7地点
101	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書31 切通し横穴群
102	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書32 煤ヶ谷古在家遺跡
103	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書34 諏訪前A遺跡第12地点
104	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書35 北仲通一丁目遺跡
105	神奈川を掘るI 玉川文化財研究所 研究論集
	公益財団法人かながわ考古学財団
106	かながわ考古学財団調査報告306 真田・北金目遺跡群
107	かながわ考古学財団調査報告307 河原口坊中遺跡 第2次調査
108	かながわ考古学財団調査報告308 上粕屋・和田内遺跡 第3次調査
109	かながわ考古学財団調査報告310 戸田小柳遺跡 第2地点
110	かながわ考古学財団調査報告311 西谷町山王通遺跡
111	かながわ考古学財団調査報告313 小原台堡壘跡・小原第3遺跡 第1次調査
112	海浜型前方後円墳の時代
113	20周年記念事業公開セミナー記録集 神奈川の発掘調査成果にみる考古学研究の転換点 2015
114	研究紀要20 かながわの考古学
115	年報21 平成25年度
	(株)アーク・フィールドワークシステム
116	神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書 26 七ノ域遺跡第8地点
	横浜市歴史博物館
117	横浜市歴史博物館 NEWS 38
118	横浜市歴史博物館 NEWS 39
	[新潟]
	新潟市文化財センター
119	細池寺道上遺跡Ⅲ 第26次調査
120	国史跡 古津八幡山遺跡保存整備事業報告書2 -1600年の時を越え よみがえる蒲原の王墓-
121	大沢谷内遺跡Ⅳ 第19・20・21次調査
	敬和学園大学 新発田学研究センター
122	年報新発田学 第六号
	敬和学園大学 人文社会科学研究所・紀要委員会事務局
123	人文社会科学研究所年報 No.13
	[富山]
	富山県埋蔵文化財センター
124	下老子笹川遺跡
125	富山県出土の重要考古資料9 下老子笹川遺跡 出土品集

126	富山県埋蔵文化財センター年報－平成25年度－
127	埋文とやま 第130号
	小矢部市教育委員会生涯学習文化課
128	小矢部市埋蔵文化財調査報告書第76冊 桜町遺跡発掘調査報告書
129	小矢部市埋蔵文化財調査報告書第77冊 桜町遺跡発掘調査報告書
	[福井]
	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
130	一乗谷朝倉氏遺跡資料館 紀要 2013
	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
131	特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡44
132	特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告11
	[山梨]
	南アルプス市教育委員会
133	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第3集 野牛島・大塚遺跡 第2地点
134	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第39集 野牛島・石橋遺跡
135	南アルプス市埋蔵文化財調査報告書 第40集 坂ノ上姥神遺跡
	山梨県立考古博物館 学芸課
136	第33回特別展 縄文の美 -世界に誇るJOMON芸術-
	[岐阜]
	岐阜県文化財保護センター
137	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第131集 荒尾南遺跡B地区Ⅱ遺跡
138	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第132集 興福地遺跡
139	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第133集 北方京水遺跡
140	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第134集 随縁寺裏B地点遺跡
141	岐阜県文化財保護センター調査報告書 第135集 梅替古墳
	[静岡]
	伊東市教育委員会文化財管理センター
142	伊東市埋蔵文化財調査報告 静岡県伊東市 市内遺跡試掘・確認調査報告書
	[愛知]
	安城市教育委員会
143	新編安城市史10 資料編考古
	[三重]
	松阪市埋蔵文化財センター
144	平成25年度 年報
	松阪市教育委員会
145	松阪市埋蔵文化財報告書14 立野古墳群発掘調査報告
	三重県埋蔵文化財センター
146	三重県埋蔵文化財調査報告355 飛塚古墳発掘調査報告
147	三重県埋蔵文化財調査報告356 公事出遺跡(第3次)発掘調査報告
148	三重県埋蔵文化財調査報告357 才良吉田谷11号墳発掘調査報告
149	三重県埋蔵文化財調査報告358 平成25年度高度水利機能確保基盤整備事業地域(有田地区)埋蔵文化財発掘調査報告
150	三重県埋蔵文化財調査報告359 高河原遺跡発掘調査報告
151	三重県埋蔵文化財調査報告360 東条1号墳・屋敷の下遺跡
152	三重県埋蔵文化財調査報告361 小ブケ遺跡発掘調査報告
153	三重県埋蔵文化財調査報告362 大蓮寺遺跡(第2次)発掘調査報告
154	三重県埋蔵文化財調査報告363 野添大辻遺跡(第2次)発掘調査報告
155	近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)建設事業に伴う 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ
156	水と大地といにしへの人びと～松阪市朝見地区の発掘調査から～
157	県営農業基盤整備事業と発掘調査
158	平成25年度 三重県埋蔵文化財年報
	[滋賀]
	大津市教育委員会文化財保護課
159	大津市埋蔵文化財調査報告書(78) 近江国府関連遺跡発掘調査報告書Ⅶ -中路遺跡-
160	大津市埋蔵文化財調査報告書(91) 埋蔵文化財発掘調査集報Ⅵ -国庫補助事業(市内遺跡発掘調査等)発掘調査報告- 中畑田遺跡 坂本里坊遺跡 南滋賀遺跡
161	大津市埋蔵文化財調査報告書(92) 石山国分遺跡発掘調査報告書
162	大津市埋蔵文化財調査年報 -平成24(2012)年度-
163	大津市埋蔵文化財調査年報 -平成25(2013)年度-
	滋賀県立琵琶湖博物館
164	科学教育研究 Vol.38 No.4
	守山市埋蔵文化財センター
165	守山市文化財調査報告書 平成25年度国庫補助対象遺跡発掘調査報告書
166	下之郷遺跡確認調査報告書Ⅸ -第79、80、84、86、89次調査報告書-
167	下之郷遺跡第93次・酒寺遺跡発掘調査報告書
	公益財団法人栗東市体育協会 文化財調査課
138	栗東市 話題の発掘調査 はっくつ2014
169	栗東発掘再発見 Vol.5 平安時代の地鎮祭 古代銭貨 10世紀
170	栗東市埋蔵文化財調査報告 2013(平成25)年度 年報
	甲良町教育委員会社会教育課
171	西明寺総門建て替え工事に伴う発掘調査報告書 西明寺遺跡
	[京都]
	立命館大学文学部考古学・文化遺産専攻
172	立命館大学文学部学芸員課程研究報告 第17冊 五塚原古墳 第5次発掘調査概報
	京都府教育庁指導部 文化財保護課
173	京都府埋蔵文化財調査報告書 平成26年度
174	京都府中世城館跡調査報告書 第4冊 -山城編2-
175	京都府中世城館跡調査報告書 別冊 -分布図・索引-
176	乙訓古墳群調査報告書

	[大阪]
	堺市教育委員会
177	堺市埋蔵文化財調査報告第147冊 境環濠都市遺跡 (SKT1029) 発掘調査概要報告
178	堺市埋蔵文化財調査報告第148冊 平成24・25年度市内遺跡発掘・立会調査概要報告
179	堺市埋蔵文化財調査報告第149冊 境環濠都市遺跡 (SKT1080) 発掘調査概要報告
180	堺市埋蔵文化財調査報告第150冊 境環濠都市遺跡 (SKT1098) 発掘調査概要報告
181	堺市埋蔵文化財調査報告第151冊 境環濠都市遺跡 (SKT1094) 発掘調査概要報告
182	堺市埋蔵文化財調査報告第152冊 余部日置荘遺跡発掘調査概要報告
183	堺の文化財 百舌鳥古墳群
184	平成25年度 国庫補助事業発掘調査報告書
	岸和田市教育委員会生涯学習部郷土文化室
185	岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書 13 尾生遺跡
186	岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書 14 大町遺跡
187	岸和田市文化財調査概要 41 平成26年度 発掘調査概要
188	第27回 濱田青陵賞授賞式
	だんじりを活かした地域共働事業実行委員会
189	だんじりを活かした地域共働事業報告書
	公益財団法人大阪府文化財センター
190	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第248集 吹田操車場遺跡10・明和池遺跡 3
191	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第249集 田井中遺跡 3
192	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第250集 総持寺遺跡 3
193	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第251集 成合遺跡・金龍寺旧境内跡 2
194	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第253集 大坂城跡 4
195	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第254集 大坂城跡 5
196	公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第255集 井尻遺跡
197	大阪文化財研究 第44号
198	大阪文化財研究 第45号
	[兵庫]
	姫路市教育委員会
199	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第24集 竹の前遺跡・畑田遺跡発掘調査報告書
200	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第25集 豊沢遺跡第7次発掘調査報告書
201	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第26集 姫路城城下町跡－姫路城跡第318次発掘調査報告書－
202	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第27集 姫路城城下町跡－姫路城跡第322次発掘調査報告書－
203	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第28集 竹の前遺跡発掘調査報告書
204	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第29集 姫路城城下町跡－姫路城跡第325次発掘調査報告書－
205	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第30集 坂本城跡第19次発掘調査報告書
206	姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第31集 姫路城城下町跡－姫路城跡第330次発掘調査報告書－
207	TSUBOHORI 平成15年度(2003) 姫路市埋蔵文化財調査略報
	たつの市立埋蔵文化財センター
208	たつの市立埋蔵文化財センター図録12 特別展 大戦の記憶
	多可町教育委員会
209	多可町文化財報告25 鍛冶屋遺跡
	[鳥取]
	鳥取県埋蔵文化財センター
210	鳥取県埋蔵文化財センター調査報告60 青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告10 石器(1)
211	第6回青谷上寺地遺跡フォーラム 人・もの・心を運ぶ船 2015
212	青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2014
213	調査研究紀要 6
	三朝町教育委員会
214	三徳山歴史遺産調査報告書第8集 名勝及び史跡 三徳山発掘調査報告書Ⅵ 平成26年度
	琴浦町教育委員会 社会教育課
215	琴浦町埋蔵文化財調査報告書第9集 八橋第11遺跡発掘調査報告書
216	琴浦町埋蔵文化財調査報告書第10集 八橋第10遺跡発掘調査報告書
217	琴浦町埋蔵文化財調査報告書第11集 大高野官衙遺跡
218	琴浦町埋蔵文化財調査報告書第12集 鳥取県東伯郡琴浦町 町内遺跡発掘調査報告書
219	琴浦町埋蔵文化財発掘調査11集 下伊勢第1遺跡発掘調査報告書
	北栄町教育委員会事務局生涯学習課 文化・スポーツ推進室
220	北栄町文化財調査報告書 第6集 平成24・25年度 町内遺跡発掘調査報告書
221	北栄町文化財調査報告書 第7集 平成26年度 町内遺跡発掘調査報告書
	[鳥根]
	鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター
222	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 3 鈴見B遺跡2区
223	一般国道9号(朝山大田道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 4 高原遺跡(2区)
224	松江城三之丸跡 松江城下町遺跡(殿町128)
225	鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報23 平成26年度
226	ドキ土器まいぶん 第56号
227	ドキ土器まいぶん 第57号
	鳥根大学ミュージアム
228	鳥根大学学術情報機構ミュージアム年報 平成25・26年度
229	鳥根大学ミュージアム・ニュースレター 「シマダイミュージ」 Shimadai Muse Vol.5
	浜田市教育委員会 文化振興課
230	平成26年度 浜田市内遺跡発掘調査報告書
231	松原遺跡 市道松原2号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
	[岡山]
	津山市教育委員会
232	津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第84集 畔田遺跡・追坊師A遺跡・黒岩遺跡・追坊師B遺跡・城山遺跡

233	年報 津山弥生の里 第22号 (平成25年度) 2015 総社市教育委員会 文化課
234	総社市埋蔵文化財発掘調査報告 23 一丁塚古墳群
235	総社市埋蔵文化財調査年報 23 (平成24年度)
236	総社市埋蔵文化財調査年報 24 (平成25年度)
	[広島]
	公益財団法人広島県教育事業団
237	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第67集 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(39) 海田原第24~27号古墳
238	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第68集 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(40) 殿平古墳・長畑山古墳
239	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第69集 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(41) 長畑山北第1~6号古墳
240	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第70集 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(42) 善正平1号遺跡・善正平2号遺跡
241	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第71集 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(43) 大柳遺跡
242	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第72集 中国横断自動車道尾道松江線建設等に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(44) 原畑遺跡 (第2次調査)
243	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第73集 国道313号道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 御領遺跡 (第4次調査2011)・御領遺跡 (第5次調査2012)
244	公益財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第74集 葛城城
245	広島県教育事業団埋蔵文化財調査室 活動報告 第4集 平成25年度ひろしまの遺跡を語る 城館研究最前線 記録集
246	年報11 (平成25年度) 2014
	三原市教育委員会 文化課
247	三原市文化財調査報告書 第17集 史跡小早川氏城跡 (三原城跡) 広島県立歴史博物館
248	広島県立歴史博物館 研究紀要 第17号
249	ふくやま草戸千軒ミュージアムニュース 第100号
250	ふくやま草戸千軒ミュージアムニュース 第101号
	[高知]
	高知県教育委員会 文化財課
251	高知県埋蔵文化財年報12 平成25年度
252	文化財こうち 第1号
	[福岡]
	北九州市立自然史・歴史博物館 歴史課
253	北九州市立自然史・歴史博物館 研究報告 B類 歴史 第12号 筑紫野市教育委員会 文化情報発信課
254	筑紫野市文化財調査報告書 第109集 太宰府条坊跡 第245次
255	筑紫野市文化財調査報告書 第110集 太宰府条坊跡 第295次
	福津市教育委員会
256	福津市文化財調査報告書第8集 香葉遺跡第2地点
257	福津市文化財調査報告書第9集 宮司志良部遺跡第2地点
258	福津市文化財調査報告書第10集 蓮鳥遺跡第2地点(1)
259	福津市文化財調査報告書第11集 宮司志良部遺跡第3地点
	築上町教育委員会 生涯学習課
260	築上町文化財調査報告書第13集 東九州自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 安武・深田B遺跡 I
	[大分]
	佐伯市教育委員会 社会教育課文化振興係
261	佐伯市文化財調査報告書 第6集 佐伯市指定有形文化財「毛利家御居間」・「三府御門」保存修理工事及び「土蔵」・「広間」 解体工事報告書
262	佐伯市文化財調査報告書 第7集 佐伯城下町遺跡 警露館跡
	[宮崎]
	宮崎県埋蔵文化財センター
263	宮崎県埋蔵文化財センター年報 第19号 平成27 (2015) 年度
	[鹿児島]
	南種子町教育委員会
264	国史跡広田遺跡史跡整備事業報告書 喜界町教育委員会
265	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 城久遺跡群 大ウフ遺跡・半田遺跡
266	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(13) 城久遺跡群 半田口遺跡
267	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(14) 城久遺跡群 - 総括報告書 -
268	喜界町埋蔵文化財発掘調査報告書(15) 中増遺跡 I
	鹿児島県立埋蔵文化財センター
269	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(183) 加治木掘遺跡
270	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(184) 弥十山遺跡 (南さつま市金峰町)
271	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(185) 合戦田陣跡 (肝属郡肝付町)
272	鹿児島県立埋蔵文化財センター 埋文だより 第67号
	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
273	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(2) 堀之内遺跡
274	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(3) 天神段遺跡 1
275	公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(4) 岩本麓遺跡
276	平成27年度 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター 要覧
277	かごしまの遺跡 第7号
278	かごしまの遺跡 第8号

IV 普及・啓発事業

1 展示公開

(1) 常設展示「掘り出された北の歴史」

展示にあたっては、国（文化庁）・七飯町・北斗市・今金町・木古内町・余市町・夕張市・長沼町・遠軽町の各教育委員会、市立函館博物館、知内町郷土資料館、芦別市星のふる里百年記念館に、展示品借用についての協力を得た。

また、企画展示との関係から、展示室とホールを併用して展示を行っている。

〔千歳市ママチ遺跡出土土面展示〕

国指定重要文化財の「土面」（国保有、昭和63年6月6日指定）を常設展示している。「土面」は、縄文時代晩期終末のもので、昭和61年に千歳市ママチ遺跡から出土した。土面としては最も北方から出土したものである。

〔遺跡調査と保護活用〕

北海道の遺跡分布、遺跡の調査や整理作業の実際、遺物の分析・保存処理の方法などについて展示・解説している。また、国宝や国指定重要文化財の複製品も展示している。

〔石の道具〕

石は人類が最初に利用した素材の一つである。旧石器時代の石の道具は、破片の接合から高度な技術で製作されたことが明らかになっている。遠軽町（旧白滝村）白滝遺跡群、千歳市柏台1遺跡、今金町ピリカ遺跡（国指定史跡）、木古内町新道4遺跡出土の石器、接合資料などを展示した。

また、縄文時代には用途に応じて、それに適した石材を選び、様々な形の石器が作られた。その使用方法を図と復元模型でわかりやすく示している。

〔木の道具〕

木の道具は、通常の遺跡では腐ってしまい残らないが、実際の生活の中では各所に使われていた。そのため、低湿性遺跡など腐食しにくい状況で出土した木の道具は、当時の人々の生活の様子を大変良く伝えてくれる。

千歳市美々8遺跡低湿部のアイヌ文化期の遺物のほか、ユカンボシC15遺跡の板綴舟、キウス4遺跡の縄文時代後期の脚付き容器などを展示している。展示品は保存処理後の遺物である。

千歳市美々8遺跡低湿部出土品は、平成17年6月9日国指定重要文化財に指定された。その一部を常設展示している。また、美々8遺跡の「美々ムラ」復元模型を置いている。



▲常設展示 1

〔金属の道具〕

金属の道具は、人類が新しく手にしたものの一つである。刀・刀子・鍋等は交易品として北海道に入ってきたものが多く、これら道具類を手に入れるための交易が、北海道社会を変容させる一つの要因となった。

金属製品も腐食しやすい材質であり、展示品は保存処理を行っている。

〔土の道具：土と火の造形〕

粘土を成形し火で焼き上げた土器は、人類が最初に手に入れた火にかけられる容器である。土器の使用により、食材の利用範囲が大きく拡大して、縄文時代の生活の安定がもたらされたと考えられている。

土器には自由な造形ができる粘土を使用しているため、時代とともに文様や形が様々に変化しており、時には機能を超越した、変わった形態や美しさをかもし出すものがある。

〔こころの道具〕

「装いとこころ」：身を飾った装身具には、ヒスイ製、コハク製などの各種玉、珠状耳飾り、土製の耳栓などがあり、当時の人々のおしゃれごころや精神生活の一端をみせてくれる。

「墓と副葬品」：墓の副葬品は、当時の生活用具をセットでみせてくれるとともに、当時の人々の「死」に対する恐れ、悲しみなど、「こころ」の一面をのぞかせてくれる。

「動物とひと」：動物意匠の土器、動物形石製品などは、人と動物とのふれあいを感じさせる。表現された動物たちに、何を感じ、何を求めていたのか、当時の人々の自然と向き合う生活の一端を考えさせられる。



▲常設展示 2

[キウスの縄文村]

千歳市キウス 4 遺跡の発掘調査から、周堤墓、盛土遺構、住居跡などをジオラマで復元した。また、合成樹脂で剥ぎ取った盛土遺構土層断面を展

示している。盛土遺構の出土遺物には、祭祀に使われたと考えられる赤彩の土器、特殊な形の土器や土製品、玉類、土偶などがある。

[ビデオコーナー]

遺跡についてわかりやすく解説した『ビビちゃんとフクロウ博士の遺跡ってなーに』『ビビちゃんとフクロウ博士の発掘体験』『ビビちゃんとフクロウ博士の縄文生活体験』などを常時上映している。

[体験コーナー]

火起し体験コーナー：きりもみ式、ひもぎり式、弓ぎり式、まいぎり式による火おこし体験ができる。

土器コーナー：土器拓本体験ができる。煮炊きに使った復元土器を展示している。

石器コーナー：石器を使ったドングリの皮むき、石器の接合、石器の紙切り体験ができる。石器の材料となる石材見本を展示している。

常設展示点数一覧

展 示 場 所 ・ コ ー ナ ー			遺物 点数	パネル・レプリカなど	合計 点数
ホール・展示回廊			0	135	135
常設展示室	受付・導入部分		4	15	19
	「遺跡調査と保護活用」部分	遺跡調査	5	74	79
		遺物の保存と分析	1	153	154
	「石の道具」部分		140	13	153
			142	15	157
	「木の道具」部分	縄文時代の石器	7	17	24
		縄文時代の木製品	29	53	82
	「金属の道具」部分		12	2	14
	「骨の道具」部分		2	3	5
	「土の道具」部分		254	43	297
	「こころの道具」部分	装いとこころ	547	4	551
		動物とひと	13	7	20
「キウスの縄文ムラ」部分		56	8	64	
「新しい時代へ」		17	2	19	
屋外	エントランスひろば		0	1	1
	中庭		0	1,820	1,820
合 計			1,229	2,365	3,594

(2) 企画展示

a 北の縄文—縄文探訪と縄文工房— 展

会 期：7月4日(土)～10月4日(日)

目 的：道内各地の縄文文化を体感し、土器づくりなどの体験を通して、北海道の縄文文化への関心を高め、より理解を深めることを目的とする。

展示場所：ホール、常設展示室、体験コーナー

展示内容

北海道の縄文文化について、縄文探訪と縄文工房の2つのテーマを通して紹介する。

1. 縄文探訪

テーマ [縄文探訪 長沼町を歩く]

(常設展示室・体験コーナー)

長沼町内の代表的な遺跡や、出土した縄文時代の遺物を紹介する。

(1) 長沼町の遺跡の特徴と縄文文化

(2) 長沼町の発掘調査

(3) 長沼町の縄文遺跡を歩く

- ・12区B遺跡(縄文時代後期)
 - *町指定有形文化財 異形環状土器
- ・タンネトウ遺跡(縄文時代早期、晩期)
- ・幌内堂林遺跡(縄文時代後期)
- ・幌内西村遺跡(縄文時代晩期)
 - *町指定有形文化財 壺型土器
- ・(公財)北海道埋蔵文化財センター調査の遺跡



▲「北の縄文—縄文探訪と縄文工房—」展



▲縄文アクセサリコレクション2015

2. 縄文工房

テーマ[長沼町の遺跡から出土した土器をつくろう]
(ホール) (体験受付：展示室受付)

(1) 異形環状土器をミニチュアでつくってみよう

12区B遺跡で出土した異形環状土器をモデルにミニチュア土器をつくってみましょう。

(2) 土器に色を塗ってみよう

異形環状土器をモデルに、ミニチュア土器を赤く塗る体験をしてみましょう。

(3) 突瘤文をつくろう

縄文時代後期の北海道で流行した土器の文様「突瘤文」を再現してみよう。

幌内堂林遺跡を由来とする堂林式土器に特徴的な文様です。

テーマ「縄文文化を体験してみよう」

(4) 勾玉づくり、ミニ土器づくり、布編みなどを自由にたいけんすることができます。

(5) 本物の土器や石器などに触れ、使い方などの体験もできます。

*体験はすべて無料。入館時に配布するポイント(10ポイント)によって整理する。

その他

縄文探訪については平成28年度以降も岩内町や恵庭、千歳、江別市などの近隣の市町村を取り上げる予定。

[展示企画] 藤井 浩

b 北海道遺跡百選 8

縄文アクセサリコレクション2015

恵庭市西島松遺跡群と副葬品 展

会 期：10月31日(土)～平成28年 2月28日(日)

目 的：北海道の代表的な遺跡について、様々な

視点からわかりやすく紹介することで、遺跡や埋蔵文化財への関心を高めることを目的とする。

展示場所：常設展示室

展示内容

「遺跡との出会い」をテーマに北海道の代表的な遺跡を探る「北海道遺跡百選」の8回目は、恵庭市西島松遺跡群をとりあげた。

遺跡群を構成する西島松2・3・5遺跡では、平成12年から19年度に至る発掘調査によって、縄文時代から擦文時代までの土坑群、住居跡群を検出した。

今回の展示では、縄文時代の土坑墓から副葬品として出土した玉や耳飾りなどの装飾品を中心に、当時の多彩なアクセサリ類を出土状況などの背景とともに紹介した。

併せて常設展示室では当センター所蔵の千歳市キウス4遺跡、美々4遺跡などほぼ同時期のアクセサリ類も展示した。また、縄文工房では縄文アクセサリづくりを体験できる。

恵庭市西島松遺跡群出土の墓壙群に副葬されたアクセサリ類を中心に紹介。

I 恵庭市西島松遺跡群の調査

遺跡の位置 発掘調査 出土遺物について

II 恵庭市西島松遺跡群と縄文時代墓群の副葬品

副葬品のいろいろ 副葬品としての装飾品

III 恵庭市西島松遺跡群出土の縄文時代装飾品群

装飾品群の特徴

土製品 石製品

IV 道埋文所蔵の縄文時代装飾品群(常設展示室)

千歳市美々4遺跡出土の縄文時代装飾品

千歳市キウス4遺跡出土の縄文時代装飾品

V 縄文アクセサリを作ってみよう(縄文工房)



▲平成26年度発掘調査成果展



▲世界遺産をめざす北の縄文展

[展示企画] 藤井 浩

**c 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター
平成26年度発掘調査成果展**

目的：公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成26年度に行った発掘調査の成果を紹介する。

期間：3月28日（土）～6月14日（日）

展示場所：ホール、常設展示室

展示内容

出土遺物や写真、解説パネルで遺跡調査の成果を紹介する。

[遺物とパネル等で紹介]

湧別町シブノツナイ2遺跡：縄文時代前期土器

根室市トーサムボロ遺跡：縄文時代前期・中期土

器、石器類

千歳市根志越5遺跡：縄文時代中期土器

木古内町大平1遺跡：縄文時代後期・晚期土器

木古内町札苺7遺跡：縄文時代後期竪穴住居跡出土遺物

木古内町札苺8遺跡：旧石器時代石器、縄文時代前期土器

木古内町泉沢5遺跡：縄文時代後期土器

北斗市館野6遺跡：縄文時代前期土器

福島町館崎遺跡：縄文時代前期・中期土器群

厚真町上幌内3遺跡：アイヌ文化期墓出土ガラス玉、古銭など

厚真町シヨロマ4遺跡：擦文土器、続縄文時代土器・石器など

厚真町オニキシベ3遺跡：縄文時代後期石器



成果展展示遺跡位置図

厚真町イクバンドユクチセ3遺跡：縄文時代中期・後期土器

岩内町東山1遺跡：縄文時代前期・中期土器、石器群（重要遺跡確認調査成果）

保存処理未公開資料

〔パネル・写真で紹介〕

長沼町幌内K遺跡・レブントン川右岸遺跡、千歳市キウス3遺跡・トプシナイ2遺跡、木古内町亀川5遺跡・大平4遺跡など

〔展示企画〕（公財）北海道埋蔵文化財センター調査部

d 世界遺産をめざす北の縄文展

会 期：通年（4月1日～平成28年3月31日）

目 的：北海道は北東北3県と連携して「北の縄文文化回廊づくり」や遺跡群の世界文化遺産登録へ向けての取り組みを行っている。公益財団法人北海道埋蔵文化財センターはこれに連携して、世界遺産登録をめざす北海道・北東北3県の縄文遺跡群について展示を行い、広く道民や道外からの観光客に情報発信をする。これにより、北海道の

歴史的風土の理解を図るとともに、世界文化遺産登録推進の取り組みへの関心を高める。

展示場所：アプローチ南側

展示内容

〔常 設〕

「開催にあたって」「世界遺産登録をめざして」「資産を構成する18遺跡と関係14市町の位置」など。

〔展示遺跡〕

北海道：キウス周堤墓群、北黄金貝塚、入江・高砂貝塚、鷺ノ木遺跡、大船遺跡、垣ノ島遺跡

青森県：三内丸山遺跡、小牧野遺跡、是川石器時代遺跡、長七谷地貝塚、亀ヶ岡石器時代遺跡、田小屋野貝塚、二ツ森貝塚、大平山元I遺跡、大森勝山遺跡

岩手県：御所野遺跡

秋田県：大湯環状列石、伊勢堂岱遺跡など

* 展示遺跡・展示物品は随時更新する。また、各道県の動向の紹介、イベントなどの案内を行う。

〔展示企画〕 倉橋直孝

2 資料の特別利用等

(1) 特別利用

番号	利 用 者	利用目的	利 用 期 間	使用方法	利 用 資 料 名	備考
1	札幌学院大学 大塚宜明	資料調査	平成27年 5月8・9日	閲覧・撮影	千歳市オサツ16遺跡出土石器（旧石器）	
2	札幌学院大学 大塚宜明	資料調査	平成27年5月12日	閲覧・撮影	千歳市オサツ16遺跡出土石器（旧石器）	
3	青森県立郷土館 中村哲也・杉野森淳子	資料調査	平成27年6月23日	閲覧・撮影	北斗市館野遺跡・千歳市キウス4遺跡出土遺物	
4	北海道大学医学部 中澤祐一	資料調査	平成27年7月2日	閲覧・撮影	千歳市オリカ2遺跡出土石器(旧石器)	
5	鈴木克彦	資料調査	平成27年7月8日	閲覧・撮影	千歳市柏台1遺跡出土コハク玉	取扱注意
6	仙台市教育委員会 斎野裕彦	資料調査	平成27年7月10日	閲覧・撮影	千歳市柏台1遺跡出土石器（旧石器）	
7	総合地球環境学研究所 松林 順	資料調査	平成27年8月19日	閲覧・撮影	千歳市美々4遺跡出土動物遺存体など	
8	駒澤大学 小林慶音	資料調査	平成27年8月27日	閲覧・撮影	千歳市オリカ2遺跡出土石器(旧石器)	
9	津田 直	資料調査	平成27年9月10日	閲覧・撮影	千歳市美々4遺跡出土クマ頭部土製品1点、赤彩土器1点。	
10	明治大学 尾崎紗羅	資料調査	平成27年9月16日	閲覧・撮影	千歳市オサツ16遺跡出土石器（旧石器）	
11	株式会社あるた出版編集部 山内絵里	資料調査	平成27年9月25日	閲覧・撮影	千歳市美々4遺跡出土土偶、木古内町新道4遺跡出土土偶ほか	
12	株式会社あるた出版編集部 山内絵里	資料調査	平成27年10月5日	閲覧・撮影	千歳市美々4遺跡出土土偶2点、木古内町新道4遺跡出土土偶1点、木古内町新道遺跡出土土偶複製品(赤色着色)1点。千歳市ママチ遺跡出土土面1点、函館市桔梗2遺跡出土土製品(複製)、千歳市キウス周堤墓ジオラマ1点、釧路市天寧1遺跡貝塚断面1点、千歳市キウス4遺跡出土土偶1点。	

13	首都大学東京大学院 吉留順平	資料調査	平成27年 10月27・28日	閲覧・撮影	千歳市柏台1遺跡出土細石刃核等	
14	株式会社アズマックス 越智英輔	資料調査	平成27年12月10日	閲覧	千歳市ママチ遺跡出土土製仮面、展示室内展示状況	
15	株式会社アズマックス 越智英輔	資料調査	平成27年12月10日	撮影	千歳市ママチ遺跡出土土製仮面(複製)、千歳市美々4遺跡出土土偶、木古内町新道4遺跡出土土偶、千歳市キウス5遺跡出土土偶(部分)	
16	ゴッソオ株式会社 代表取締役 社長 宿田牧夫	月刊誌 「O.tone」 対談記事 取材のため	平成28年2月24日	撮影	展示室内展示風景(背景として)	
17	北海学園大学非常勤講師 澤井 玄	月刊誌 「O.tone」 対談記事 取材のため	平成28年2月24日	撮影	展示室内展示風景(背景として)	
18	東北大学 鹿又喜隆	資料調査	平成28年 3月1・2日	閲覧	千歳市オサツ16遺跡・祝梅川上田遺跡・アンカリト7遺跡出土旧石器	
19	信濃毎日新聞社 土橋正道	取材のため	平成28年3月9日	閲覧・撮影	福島町館崎遺跡出土石器	

(2) 模写品等の刊行等の承認

番号	申請者	使用目的	使用方法	利用資料名・点数	申請書	承認書	備考
1	むかわ町教育委員会 教育長 阿部博之	町主催文化財展示写真パネルに使用	複写	むかわ町宮戸4遺跡発掘調査写真ほか 写真デジタルデータ計11点	平成27年 4月3日	平成27年 4月9日	
2	敬文舎 代表取締役 柳町敬直	安斎正人『縄文人の生活世界』に使用	複写	函館市中野B遺跡竪穴住居跡群写真 写真デジタルデータ計1点	平成27年 4月2日	平成26年 4月9日	
3	久慈琥珀博物館 館長 向 正彰	久慈琥珀博物館企画展『縄文の赤と緑』展示パネルに使用	複写	知内町湯の里4遺跡琥珀玉出土写真 写真デジタルデータ計2点	平成27年 4月10日	平成26年 4月16日	
4	サケのふるさと千歳水族館 館長 菊地基弘	水族館の新展示パネル作成に使用	複写	千歳市ユカンボシC15遺跡出土サケたたき棒の写真ほか 写真デジタルデータ計4点	平成27年 4月30日	平成27年 5月12日	
5	八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館 館長 古館光治	平成27年度特別展示「漆と縄文人」の展示等に使用	複写	千歳市柏台1遺跡出土赤色顔料が付着した台石の写真ほか 写真デジタルデータ計2点	平成27年 5月14日	平成26年 5月20日	
6	株式会社セブンクリエイティブ 代表取締役 加治 陽	『にっぽん全国 土偶手帖』に使用	複写	千歳市美々4遺跡出土土偶写真 写真デジタルデータ計2点	平成27年 5月21日	平成26年 5月27日	
7	北の縄文道民会議 代表 堀 達也	世界文化遺産登録推進事業に使用	複写	千歳市ママチ遺跡出土土面写真ほか 写真デジタルデータ計5点	平成27年 5月19日	平成26年 5月29日	
8	青森県立郷土館 館長 山田勝規	特別展および関連事業に使用	複写	千歳市キウス1号周堤墓写真ほか 写真デジタルデータ計3点	平成27年 7月27日	平成27年 7月31日	
9	株式会社かみゆ 滝沢弘康	『世界史が教えてくれる!あなたの知らない日本史』に使用	複写	恵庭市西島松5遺跡出土刀写真 写真デジタルデータ計1点	平成27年 8月6日	平成27年 8月18日	
10	有限会社コーベット・フォト エージェンシー 代表取締役 丹羽方人	『日本史のライブラリー』に使用	複写	遠軽町白滝赤石山黒曜石露頭写真 写真デジタルデータ計1点	平成27年 8月26日	平成27年 9月2日	
11	北海道胆振総合振興局 保健環境部 保健環境課長 村上 宏	北の縄文パネル展示展示パネルに使用	複写	豊浦町高岡1遺跡包含層出土の土器写真ほか 写真デジタルデータ計7点	平成27年 9月3日	平成27年 9月11日	
12	公益財団法人ふくしま海洋 科学館 理事長 安倍義孝	土面づくりワークショップの解説パネルに使用	複写	千歳市ママチ遺跡土面写真 写真デジタルデータ計1点	平成27年 9月16日	平成27年 9月28日	
13	青森県立郷土館 館長 山田勝規	特別展示パネル、展示案内小冊子などに使用	複写	斜里町朱田周堤墓トレンチ調査状況写真ほか 写真デジタルデータ計16点	平成27年 9月18日	平成27年 9月29日	

14	(株)小学館出版局 チーフプロデューサー 伊藤礼子	『日本美術全集』第1巻「日本美術創世記」に使用	複写	北斗市茂別遺跡出土土器集合写真ほか 写真デジタルデータ計3点	平成27年 10月21日	平成27年 10月29日	
15	株式会社ライヴ環境計画 代表取締役 有山忠男	北海道の歴史文化についてのアンケート調査に使用	複写	千歳市ママチ遺跡出土土面写真 写真デジタルデータ計1点	平成27年 10月27日	平成27年 10月29日	
16	瀬川拓郎	『アイヌと縄文』（ちくま新書）に使用	複写	千歳市キウス1号周堤墓写真ほか 写真デジタルデータ計4点	平成27年 11月9日	平成27年 11月16日	
17	株式会社文藝春秋国際局 高橋夏樹	『日本人はどこからきたのか?』に使用	複写	千歳市オリカ2遺跡出土細石刃核・細石刃写真 写真デジタルデータ計1点	平成27年 12月8日	平成27年 12月16日	
18	譽田亜紀子	東京新聞および中日新聞の水曜夕刊に使用	複写	千歳市美々4遺跡出土土偶写真 写真デジタルデータ計1点	平成27年 12月11日	平成27年 12月22日	
19	恵庭市郷土資料館 館長 菅原伸治	展示パネル及びデジタルフォトフレームに使用	複写	恵庭市西島松5遺跡全景写真ほか 写真転載計28点	平成27年 12月22日	平成27年 12月28日	
20	北海道環境生活部くらし安全局文化・スポーツ課縄文世界遺産室長 小出幸希	縄文雪まつり展示に使用	複写	千歳市美々4遺跡動物形土製品写真ほか 写真デジタルデータ計9点	平成27年 12月25日	平成28年 1月8日	
21	株式会社 国書刊行会 代表取締役 佐藤今朝夫	『縄文人の世界観』に使用	複写	千歳市美々4遺跡周堤墓写真ほか 写真デジタルデータ計2点	平成28年 2月5日	平成28年 2月10日	
22	株式会社ランズ 代表取締役社長 市岡正朗	『日本歴史大地図』（仮題）に使用	複写	知内町湯の里4遺跡出土玉類写真 写真デジタルデータ計1点	平成28年 2月8日	平成28年 2月16日	
23	株式会社ランズ 代表取締役社長 市岡正朗	『日本歴史大地図』（仮題）に使用	複写	千歳市キウス周堤墓群1号周堤墓写真 写真デジタルデータ計1点	平成28年 2月8日	平成28年 2月16日	
24	大島直行	『財界さっぽろ』4月号に使用	複写	千歳市キウス周堤墓群1号周堤墓写真 写真デジタルデータ計1点	平成28年 3月1日	平成28年 3月4日	
25	札幌国際大学縄文文化研究室 室長 越田賢一郎	縄文世界遺産研究室開室記念展示に使用	複写	千歳市キウス周堤墓群写真ほか 写真パネル利用計11点、写真デジタルデータ計6点	平成28年 3月25日	平成28年 3月30日	

(3) 資料の貸出承認

番号	申請者	利用目的	利用期間	利用資料名・点数	申請書	承認書	備考
1	江別市立対雁小学校 校長 菊地秀夫	対雁小学校6年生社会科での授業教材	平成27年4月17日～21日	江別市対雁2遺跡出土土器9点、江別市対雁2遺跡出土土器9点	平成27年 4月4日	平成26年 4月14日	
2	札幌学院大学 学長 鶴丸俊明	黒曜石資料の原産地分析	平成27年5月15日～9月14日	千歳市オサツ16遺跡出土土器(B区 ブロック1)2,000点	平成27年 5月15日	平成27年 9月14日	
3	北海道・北東北の縄文遺跡群の世界遺産登録をめざす道民会議 代表 堀達也	北の縄文道民会議主催「縄文夏まつり」展示	平成27年6月29日～7月17日	重要文化財「土面」(千歳市ママチ遺跡出土)複製1点、重要文化財「動物型土製品」(千歳市美々4遺跡出土)複製1点、道指定有形文化財「赤彩注口土器」(八雲町野田生1遺跡出土)複製1点	平成27年 5月19日	平成27年 6月3日	
4	北海道大学 埋蔵文化財調査センター センター長 小杉 康	北海道大学埋蔵文化財調査センター企画展	平成27年9月29日～12月18日	千歳市キウス9遺跡出土土器1点	平成27年 9月7日	平成27年 9月11日	
5	青森県立郷土館 館長 山田勝規	青森県立郷土館平成27年度特別展での展示等	平成27年10月7日～12月25日	千歳市キウス4遺跡出土資料及び展示模型39点、北斗市館野遺跡出土資料21点	平成27年 9月16日	平成27年 9月25日	
6	北海道環境生活部くらし安全局文化・スポーツ課縄文世界遺産推進室長 小出幸希	縄文雪まつり展示のため	平成28年1月25日～2月19日	千歳市美々4遺跡出土動物形土製品複製ほか13点	平成27年 12月25日	平成28年 1月19日	



▲ガラス玉づくり入門



▲発掘調査入門（2）

3 講座等の開催

(1) 一般道民対象の講座

a ガラス玉づくり入門

日 時：6月13日（土） 13：30～15：40
 講 師：装飾タイル作家 宮崎幸子 氏
 参加者：17名（うち道民カレッジ生6名）
 内 容：北海道の遺跡から出土する様々なガラス玉について、その歴史を学ぶとともに、作り方についての説明とガラス玉をつくる実験を行った。

b 発掘調査入門(1)

日 時：8月8日（土） 13：30～15：30
 講 師：第1調査部普及活用課 主査 倉橋直孝
 参加者：17名（うち道民カレッジ生10名）
 内 容：スライドをみながら、発掘調査の概要をとらえ、遺跡調査に関心を持ってもらうため、会場研修室のセットを利用して、レベルを使い、測量を行った。

c 発掘調査入門(2)

日 時：9月5日（土） 13：30～15：10
 講 師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩
 参加者：22名（うち道民カレッジ生17名）
 内 容：発掘調査の成果が報告書にどのようにまとめられているかを説明した。「なぜ遺構の有無がわかるのか」「土の見きわめ方」など特に土層の観察や記述の仕方に焦点を当てて解説した。

d 石器づくり入門

日 時：11月14日（土） 13：30～15：30
 講 師：第1調査部第3調査課 主査 直江康雄

参加者：15名（うち道民カレッジ生7名）
 内 容：手持ちのナイフを例として石器づくりの基本原則や刃部の作り方など、石器づくりの概要、「刃つぶし加工」と「押圧剥離」の2種類の加工方法を解説した。黒曜石を素材にして、刃つぶし加工によるナイフづくり、押圧剥離による石器づくりの実習を行った。

e 埋文センター発掘物語 遠軽町白滝遺跡群の調査

—768万点、15トンの黒曜石が語ること—

日 時：11月28日（土） 13：30～15：30
 講 師：第1調査部第4調査課 主査 鈴木宏行
 第1調査部第4調査課 主査 坂本尚史
 第1調査部第3調査課 主査 直江康雄
 参加者：26名（うち道民カレッジ生13名）
 内 容：世界的な黒曜石産地として有名な遠軽町白滝遺跡群の発掘調査からは多くの知見が得られた。今回の講座では、発掘調査に従事した旧石器時代を専門とする講師陣がスライドにより白滝遺跡群の魅力をわかりやすく解説した。

(2) 児童生徒学生対象の体験型講座

a 親子ガラス玉づくり教室

日 時：6月20日（土） 13：30～15：30
 講 師：装飾タイル作家 宮崎幸子 氏
 参加者：16名
 内 容：親子（児童・生徒とその保護者）を対象としたガラス玉づくりで、内容は一般道民対象の講座とほぼ同内容である。



▲石器づくり入門



▲まいぶん遺跡探検隊（第2次）



▲親子ガラス玉教室



▲むかわ町出前講座

b 夏休み自由研究教室

まいぶん遺跡探検隊（第1次）

日時：7月25日（土） 13：30～16：00

講師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩

参加者：20名（うち中学生以下11名）

内容：「土器で遊ぶ、学ぶ」をテーマとして、塗り絵や拓本を楽しみながら大昔の人たちが作った土器を観察し、土器がどのように作られたのかを考えながら、ミニチュア土器をつくった。

c 夏休み自由研究教室

まいぶん遺跡探検隊（第2次）

日時：8月1日（土） 13：30～16：00

講師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩

参加者：31名（うち中学生以下19名）

内容：「石器で遊ぶ、学ぶ」をテーマとして、砂絵や塗り絵を楽しみながら大昔の人たちが作った石器を観察し、石器がどのように作られたのかを考えながら、ミニチュアの石斧を作った。また、

弓矢の体験や石器がどのように使われたかを考えるクイズを楽しんだ。

d 冬の縄文生活体験ひろば

期間：平成27年1月9日（日）～3月6日（日）

会場：常設展示室前縄文生活体験ひろば

内容：縄文時代の道具づくり体験を通して当時の人々の生活の様子を学ぶ。道具や材料を自分で選び、レシピを参考に自由に体験できる。

e 冬休み自由研究教室

まいぶん遺跡探検隊（第3次）

日時：平成27年1月9日（土） 13：30～16：00

講師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩

参加者：22名（うち中学生以下11名）

内容：「縄文火おこしにはまる冬休み 火おこしマスターに挑戦！」と題し、展示室・収蔵庫の探検の後、火おこしに挑戦した。道具づくりから火をおこすまでを体験した。



▲砂川市出前講座



▲上川町出前講座

f 冬休み自由研究教室

まいぶん遺跡探検隊（第4次）

日時：平成27年1月16日（土） 13：30～16：00

講師：第1調査部普及活用課 主査 藤井 浩

参加者：28名（うち中学生以下14名）

内容：第4次は「発掘体験！ 室内で体験・発掘調査と遺跡の不思議」と題し、展示室・収蔵庫の探検の後、スコップやレベルなど発掘調査で使われている道具を使った様々な体験をした。

(3) 児童生徒対象の出前講座

a 事業目的

完全学校週5日制に対応して、土曜日や日曜日の休日に、市町村教育委員会との連携の下で、子供たちにとってわかりやすく地域の歴史や文化を説明するとともに、それらを大切にすることを養い、体験学習を通して豊かな人間性や多様な個性を育むことを目的とする。

これまで、道立センター内で行ってきた考古学教室を、全道の市町村に出向いて地元教育委員会と連携を図って実施することにより、市町村独自の事業実施の契機となるよう努めている。

b 事業内容

①地域の遺跡を学ぶ—実物に触れてみよう—

遺物に触れてもらいながら、地元市町村の埋蔵文化財についての説明を行う。また、埋蔵文化財センター紹介のビデオ『遺跡ってなーに』を鑑賞する。

②体験学習

縄文時代等にアクセサリーとして使用されてい

た「勾玉」を、滑石を材料にして、製作する。また、時間の許す限り、石器（黒曜石破片）での紙切り、火起こしなどの体験を行う。

34ページの表のとおり7か所で実施した。

(4) 教育連携講座

児童会、小学校、中学校、大学、教育委員会等を対象とする体験型教育連携講座を、34ページの表の通り11回実施した。

火おこし・勾玉作り・ミニチュア土器づくり・拓本体験学習、展示室やバックヤードの見学、展示室探検クイズラリーなどを内容とする。

北海道教育委員会からの依頼により、平成25年度から「道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修」（夏・冬季休業期間分、教職員対象）を実施している。

(5) 一般道民対象の講演会

a 夏季講演会

DNAからみたヒグマの系譜

—考古学と分子系統学のコラボレーション

日時：6月6日（土） 13：30～15：30

講師：北海道大学大学院理学研究院教授

増田隆一 氏

参加者：43名（うち道民カレッジ生14名）

内容：遺跡から出土した骨のDNA分析などにより遺跡調査とも関わりの深い講師から、分子系統学と考古学とのコラボレーションの現状や明らかになったことなどを紹介していただいた（詳細は38～45ページ、7講演会要旨(1)夏季講演会参照）。

企画：倉橋直孝



▲夏季講演会



▲秋季講演会

b 秋季講演会

考古学と文献史学—新しい関係構築をめざして

日時：10月10日（土） 13：30～15：30

講師：東京大学大学院総合文化研究科教授
桜井英治 氏

参加者：73名（うち道民カレッジ生24名）

内容：専門の日本中世史・近世史にとどまらず、幅広い視野で歴史学全般を探求されている講師から、遺跡調査など考古学分野との協同で生まれた考古学と歴史学の成果などについて紹介していただいた（詳細は46～53ページ、(2)秋季講演会参照）。
企画：倉橋直孝

(6) 近隣市町村等対象の出前講座

近隣市町村教育委員会・学校等から出前講座の依頼があった場合には、その都度検討して、対応できる場合には実施している。今年度は34ページの表のとおり3か所で実施した。

(7) 公益財団法人北海道埋蔵文化財センター 平成26年度発掘調査報告会

日時：4月18日（土） 13：30～16：30

参加者：89名（うち道民カレッジ生41名）

内容：平成26年度に（公財）北海道埋蔵文化財センターが調査を行った遺跡のうち①～⑤の発掘成果の報告と、特別展示「（公財）北海道埋蔵文化財センター平成26年度発掘調査成果展」会場での報告者による展示解説を行った。

- ①千歳市トプシナイ 2 遺跡・レブントン左岸遺跡
鈴木宏行
- ②千歳市根志越 5 遺跡
山中文雄

- ③木古内町札苅 7 遺跡
芝田直人
 - ④木古内町泉沢 5 遺跡
直江康雄
 - ⑤木古内町大平 4 遺跡
立田 理
 - ⑥厚真町上幌内 3 遺跡・シヨロマ 4 遺跡
阿部明義
 - ⑦厚真町オニキシベ 3 遺跡
奥山さとみ
 - ⑧木古内町札苅 8 遺跡、根室市トーサムポロ湖周辺堅穴群
広田良成
- 企画：（公財）北海道埋蔵文化財センター調査部

4 協 力

(1) 北海道文化財保護協会

「子どもの文化財愛護推進事業」

北海道文化財保護協会の「子どもの文化財愛護推進事業」に協力し、35ページの表のとおり1か所で実施した。

(2) 講師派遣

教育委員会・大学の依頼により35ページの表のとおり7か所に講師を派遣した。

(3) 職場体験

江別市教育委員会の依頼によりキャリア教育（中学生の職場体験）を35ページの表のとおり6件受け入れた。

(4) インターンシップ

北海道教育委員会の依頼によりインターンシップを35ページの表のとおり1件受け入れた。

(5) 博物館実習

各大学の依頼により博物館実習の学生を35ペー



▲平成26年度発掘調査報告会



▲木古内町出前講座（北海道文化財保護協会協力）

ジの表のとおり1件受け入れた。

5 周辺施設・大学との連携

江別市から札幌市北東部に所在する各文化施設や大学と、以下の連携を行っている。各連携参加状況等については36ページの表のとおり。

(1) 文京台地区道立教育3施設連携

江別市文京台地区にある北海道立図書館、北海道立教育研究所、北海道立埋蔵文化財センターが、今後さらに地域に根ざし、開かれた「施設」を目指すため、平成15年から連携事業を行っている。今年度も、7月以降に実施する事業を紹介するリーフレットを合同で作成し、文京台第1自治会(約280戸)、文京台第2自治会(約900戸)、文京台東町自治会(約490戸)の計約1670戸に145部回覧した。

(2) かるちやるnet

新札幌から江別市南西には社会教育的文化施設が集中し、地域に暮らす人たちにとって恵まれた環境にある。各文化施設は地域文化の向上や知的財産の継承など重要な役目を担っているが、財政の悪化により運営・事業の見直しを迫られ、取り巻く情勢は厳しさを増している。このような状況を踏まえ、各施設が協力・連携を強化し、意見交換・連携事業・広報事業などの実施を協議する場として結成された。

平成21年に北海道がイオン北海道(株)との包括的連携協定を締結する際に北海道開拓記念館が企業側に提案した「道の教育・文化施設の広報活動への協力・協働事業」を基礎とする。

a てくてく、ぺったん！

かるちやる スタンプラリー

日時：7月18日(土)～8月23日(日)

場所：江別市郷土資料館・江別市セラミックアートセンター、北海道立図書館・北海道立埋蔵文化財センター・自然ふれあい交流館・北海道博物館・北海道開拓の村、札幌市青少年科学館・サンピアザ水族館の9施設。

内容：各施設でスタンプをもらい、5館または9館を巡ってスタンプが揃ったら記念品が貰える。記念品の交換場所は、江別市郷土資料館、北海道立埋蔵文化財センター、札幌市青少年科学館の3か所とした。全体のシート配布数は6,802枚、記念品交換数は江別市郷土資料館で99個、北海道立埋蔵文化財センターで142個、札幌市青少年科学館で67個の計308個である。期間中のセンター入館者は1,940人だった。

b 発見・体験 文化の秋

—遊ぼう！学ぼう！あつべつ・えべつ—

日時：10月25日(日) 10:00～21:00

場所：サンピアザ1階 光の広場

内容：江別市郷土資料館・江別市セラミックアートセンター・北海道立図書館・北海道立埋蔵文化財センター・自然ふれあい交流館・北海道博物館・北海道開拓の村・札幌市青少年科学館・サンピアザ水族館の紹介パネルを展示して、広報資料を配布した。

体験・展示コーナー・ワークショップでは、大型絵本・昔の雑誌・しかけ絵本展示(北海道立図書館)、砂絵体験(北海道立埋蔵文化財センター)、



▲発見・体験 文化の秋

化石レプリカづくり・昔体験・トンコリ演奏（北海道博物館）、紙とんぼ作り（北海道開拓の村）、デジタル宇宙旅行（青少年科学館）、カニ釣り体験・ペンギンと撮影会（サンピアザ水族館）などを行った。

また、クイズラリーやアンケートを実施し、クイズ回答者にはもれなく記念品をプレゼントした。

c かるちやるガーデン2015

日 時：11月29日（日）

10：00～15：00（第1会場）

10：00～15：30（第2会場）

場 所：札幌市中央区北5条西5丁目7

sapporo55ビル

第1会場；紀伊國屋書店札幌本店

インナーガーデン（1階）

第2会場；北海道教育大学札幌駅前サテライト

（4階）

主 催

北海道教育大学学校・地域教育支援センター

かるちやるnet（文化施設連絡協議会）

内 容：多数の来訪者が期待される札幌市中心部の施設を会場として、博学連携のもと道内の児童ならびにファミリー層の自発的文化活動の振興（文化施設の利用向上）をはかることを目的とし、かるちやるnetと北海道教育大学の協働により実施した文化施設PR・普及イベント。

1階の紀伊國屋書店前のインナーガーデンで①アンモナイトレプリカ作り体験（北海道博物館）、4階の北海道教育大学札幌駅前サテライトでは、②絵本読み聞かせ（北海道立図書館）、③ダイオウグソクムシの標本にさわろう！（サンピアザ水族館）、④デジタル宇宙シアター～宇宙の姿を探る宇宙旅行へ（札幌市青少年科学館）、稲わらでつくるプチしめ縄（北海道開拓の村）、⑥砂絵で遊ぼう！、⑦絵本の世界へようこそ、⑧かるちやるクイズラリー（各施設）、などの体験型広報ワークショップを行った。参加人数は283名である。

(3) のっぽろ11ネット

今年度は活動していない。

周辺施設との連携参加一覧

名 称	文京台地区道立教育3施設連携	かるちやるnet	のっぽろ11ネット
江別市郷土資料館		○	
江別市スポーツ振興財団			○
野幌自治会			○
北海道情報大学			○
野幌中学校			○
江別市セラミックアートセンター		○	○
野幌総合運動公園事務所			○
酪農学園大学			○
北海道立図書館	○	○	
北海道立教育研究所	○	○	
札幌学院大学			○
北翔大学			○
北海道立埋蔵文化財センター	○	○	○
自然ふれあい交流館		○	
道立自然公園野幌森林公園		○	
北海道博物館		○	
北海道開拓の村		○	○
サンピアザ水族館		○	
札幌市青少年科学館		○	

6 利用状況

(1) 入館者数一覧

月別入館者数

	開館日数			大人(男性)			大人(女性)			子供			合計		
	26年度	27年度	前年度比(%)	26年度	27年度	前年度比(%)	26年度	27年度	前年度比(%)	26年度	27年度	前年度比(%)	26年度	27年度	前年度比(%)
4月	26	26	100	509	440	86.4	454	333	73.3	187	196	104.8	1,150	969	84.3
5月	27	27	100	378	385	93.7	274	286	104.4	315	320	101.6	967	991	102.5
6月	25	25	100	447	629	140.7	444	476	107.2	316	240	75.9	1,207	1,345	111.4
7月	29	27	93.1	550	472	85.8	506	334	66	240	294	122.5	1,296	1,100	84.9
8月	27	26	96.3	359	503	140.1	355	449	126.5	577	757	131.2	1,291	1,709	132.4
9月	26	27	103.8	348	419	120.4	241	385	159.8	236	374	158.5	825	1,178	142.8
10月	28	28	100	400	385	96.3	310	313	101	193	212	109.8	903	910	100.8
11月	26	25	96.2	337	440	130.6	255	285	111.8	94	186	197.9	686	911	132.8
12月	18	19	105.6	174	243	139.7	98	149	152	72	121	168.1	344	513	149.1
1月	24	24	100	141	207	146.8	171	215	125.7	101	263	260.4	413	685	165.9
2月	24	23	95.8	139	236	169.8	108	208	192.6	36	98	272.2	283	542	191.5
3月	21	21	100	182	261	143.4	98	225	229.6	101	220	217.8	381	706	185.3
合計	301	298	1190.8	3,964	4,620	1,494	3,314	3,658	1,550	2,468	3,281	1,921	9,746	11,559	1,584
平均	25.1	24.8	99.2	330.3	385.0	124.5	276.2	304.8	129.2	205.7	273.4	160.1	812.2	963.3	132.0

平成11～27年度までの月別入館者数

①平成11～19年度までの月別入館者数

	11	12	13	14	15	16	17	18	19	計
4月		758	656	545	538	831	595	830	669	5,422
5月		709	453	656	1,081	964	716	1,440	1,228	7,247
6月		652	621	808	1,299	1,054	858	768	1,099	7,159
7月		527	303	633	922	828	1,124	1,138	1,425	6,900
8月		673	388	662	789	747	851	1,238	1,517	6,865
9月		544	374	631	762	1,020	727	790	907	5,755
10月		650	302	649	991	1,027	773	945	939	6,276
11月	1,988	467	659	445	836	669	618	669	627	6,978
12月	687	286	326	669	505	330	318	232	536	3,889
1月	593	218	411	287	229	189	240	462	633	3,262
2月	366	129	240	212	270	187	189	226	329	2,148
3月	469	221	362	297	331	296	366	329	528	3,199
合計	4,103	5,834	5,095	6,494	8,553	8,142	7,375	9,067	10,437	65,100

②平成20～27年度までの月別入館者数

	20	21	22	23	24	25	26	27	計	①②合計
4月	904	1,192	799	920	1,244	1,201	1,150	969	8,379	13,801
5月	1,403	1,978	1,755	1,223	1,127	1,359	967	991	10,803	18,050
6月	1,150	934	1,597	1,277	1,143	1,360	1,207	1,345	10,013	17,172
7月	1,126	1,537	1,117	1,278	1,243	1,590	1,296	1,100	10,287	17,187
8月	1,267	1,370	982	1,230	1,727	1,809	1,291	1,709	11,385	18,250
9月	768	1,169	995	1,110	1,018	1,242	825	1,178	8,305	14,060
10月	1,267	1,120	1,214	839	1,019	1,382	903	910	8,654	14,930
11月	653	745	794	539	736	714	686	911	5,778	12,756
12月	488	577	370	423	426	411	344	513	3,552	7,441
1月	488	516	344	379	551	603	413	685	3,979	7,241
2月	450	374	268	286	405	524	283	542	3,132	5,280
3月	549	472	511	696	654	622	381	706	4,591	7,790
合計	10,513	11,984	10,746	10,200	11,293	12,817	9,746	11,559	88,858	153,958

は各月で最多(平成11年度を除く)

特別展示期間中の入館者数

展示タイトル	期間	入館者数
(公財)北海道埋蔵文化財センター平成26年度発掘調査成果展	3月28日(土)～6月14日(日)	2,975
北の縄文—縄文探訪と縄文工房—展	7月4日(土)～10月4日(日)	4,063
北海道遺跡百選8 縄文アクセサリ—コレクション2015 恵庭市西島松遺跡群と副葬品展	10月31日(土)～平成28年2月28日(日)	2,675
特別展示期間中の入館者数合計		9,713
世界遺産をめざす北の縄文展	4月1日(水)～平成28年3月31日(木)	11,559

一般道民対象の講座

	年	月	日	曜日	事業名	参加人数
1	平成27	6	13	土	考古学講座「ガラス玉づくり入門」	17
2		8	8	土	考古学講座「発掘調査入門(1)」	17
3		9	5	土	考古学講座「発掘調査入門(2)」	22
4		11	14	土	石器づくり入門	15
5		11	28	土	埋文センター発掘物語 遠軽町白滝遺跡群の調査	26
計						97

児童生徒学生対象の体験型講座

	年	月	日	曜日	事業名	参加人数
1	平成27	6	20	土	こども考古学講座「親子ガラス玉づくり教室」	16
2		7	25	土	こども考古学講座「夏休み自由研究教室まいぶん遺跡探検隊 第1次	20
3		8	1	土	こども考古学講座「夏休み自由研究教室まいぶん遺跡探検隊 第2次	31
4	平成28	1	9	土	こども考古学講座「冬休み自由研究教室まいぶん遺跡探検隊 第3次	22
5		1	16	土	こども考古学講座「冬休み自由研究教室まいぶん遺跡探検隊 第4次	28
計						117

児童生徒対象の出前講座

	年	月	日	曜日	実施場所	備考	参加人数
1	平成27	6	25	木	むかわ町立富内小学校	全校生徒対象	14
2		7	11	土	羽幌町中央公民館	羽幌町子ども自然教室	32
3		8	2	日	砂川市オアシスパーク遊水地管理棟	平成27年度砂川市防災フェスティバル	23
4		8	5	水	蘭越町民センターらぶちゃんホール	ちびっこチャレンジクラブ	43
5		8	29	土	上川町かみんぐホール	平成27年度公民館講座	11
6		10	3	土	雨竜町公民館	2015ちびっこチャレンジ教室	30
7		10	17	土	厚岸町立真龍小学校	「まが玉づくり教室」	18
計							171

教育連携講座

	年	月	日	曜日	事業名	参加人数	
1	平成27	5	12	火	江別市立文京台小学校6年生体験学習(展示室探検ラリー・火起こし)	34	
2		7	12	日	北翔大学短期大学部太田先生・菊地先生講義利用(理科・社会科指導法)(講義・施設見学・勾玉)	20	
3		7	16	木	江別市立北光小学校宿泊研修(ミニチュア土器作り・砂絵・勾玉・編布)	25	
4		7	23	木	札幌学院大学国際交流センター留学生講義利用(講義・施設見学・勾玉)	28	
5		8	1	土	平成27年度道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修(夏季休業期間分・教職員対象)(施設見学・バックヤードツアー・まいぶん遺跡探検隊参加)	1	
6		8	8	土	平成27年度道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修(夏季休業期間分・教職員対象)(施設見学・バックヤードツアー・まいぶん遺跡探検隊参加)	1	
7		8	26	水	江別市立上江別小学校体験学習(火起こし・ミニチュア土器・拓本・展示室探検ラリー)	158	
8		9	4	金	岩見沢市立幌向小学校体験学習(展示室探検ラリー・勾玉)	60	
9		9	27	日	北広島市西部地区青少年健全育成連絡協議会体験学習(展示室探検ラリー・勾玉)	93	
10		平成28	1	15	金	平成27年度道立埋蔵文化財センター活用学習のための指導者研修(冬季休業期間分・教職員対象)(施設見学・バックヤードツアー)	2
11			2	4	水	札幌学院大学国際交流センター留学生講義利用(講義・施設見学・勾玉)	53
計						475	

講演会

	年	月	日	曜日	事業名	参加人数
1	平成27	6	6	土	夏季講演会 DNAからみたヒグマの系譜—考古学と分子系統学のコラボレーション	43
2		10	10	土	秋季講演会 考古学と文献史学—新しい関係構築をめざして	73
計						116

近隣市町村対象の出前講座

	年	月	日	曜日	実施場所	備考	参加人数
1	平成27	8	29	土	江別市役所隣接地	江別青年会議所「まるごと江別2015」(ミニ勾玉)	100
2		9	11	金	岩見沢市立北真小学校	総合学習「北海道の歴史」(火起こし、土器・石器ハンズオン、縄文鍋)	25
3		10	3	土	札幌市立平岡公園小学校	ふれあい空間2015(勾玉)	47
計							172

報告会

	年	月	日	曜日	事業名	参加人数
1	平成27	4	18	土	平成26年度公益財団法人北海道埋蔵文化財センター発掘調査報告会	89
計						89

北海道文化財保護協会「子どもの文化財愛護推進事業」協力の出前講座

	年	月	日	曜日	実施場所	備考	参加人数
1	平成27	10	4	日	木古内町郷土資料館	土偶のおはなしと土偶づくり	21
計							21

講師派遣

	年	月	日	曜日	実施場所	備考	参加人数
1	平成27	7	4	土	北海道教育大学札幌校	あいの里土曜講座（勾玉、学生の講座運営協力）	50
2		7	6	月	北海道教育大学札幌校	北海道の文化財と地域教育（講義）	22
3		7	11	土	札幌駅前通り地下歩行空間	縄文土器の拓本教室（拓本）	35
4		7	12	日	北4条イベントスペース		40
5		8	21	金	札幌市資料館	「勾玉づくり講座」	25
6		9	27	日	蘭越町山村開発センター	第17回蘭越町生涯学習フェスティバル 考古学教室「勾玉づくり」	47
7		12	4	金	札幌学院大学	人文地理学（講義）	30
計							249

職場体験

	学校名	受入期間	備考	参加人数
1	江別市立大麻東中学校	7月14日（火）～7月16日（木）	受付・展示・図書関連作業、体験学習教材づくり	4
2	江別市立江別第三中学校	8月26日（水）～8月27日（木）		6
3	江別市立大麻中学校	10月20日（火）～10月22日（木）		6
4	江別市立野幌中学校	10月27日（火）～10月29日（木）		6
5	江別市立江別第二中学校	11月3日（火）～11月5日（木）		2
6	江別市立江別第二中学校	11月18日（水）～11月20日（金）		6
計				30

*1～5は3年生、6は2年生。

インターンシップ

	年	月	日	曜日	団体名など	備考	参加人数
1	平成27	8	27	木	北海道博物館インターンシップ	施設見学・整理作業見学	3
計							3

博物館実習

	学校名	受入期間	備考	参加人数
1	札幌学院大学	7月15日（水）～7月25日（土） *7月18日（土）～7月20日（月）、7月24日（金）を除く	受付・展示・図書関連作業、教材作成、講座運営補助	2
計				2

(2) 団体利用者対応

幼稚園

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成28	1	6	水	もみじ台幼稚園土玉づくり・砂絵体験	32
計						32

小学校

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	4	22	水	札幌市立小野幌小学校6年生体験学習（展示室探検ラリー・火起こし）	37
2		5	7	木	札幌市立小野幌小学校6年生体験学習（展示室探検ラリー・火起こし）	34
3		5	8	金	札幌市立小野幌小学校6年生体験学習（展示室探検ラリー・火起こし）	36
4		6	24	木	江別市立文京台小学校2年生施設見学	30
5	平成28	12	11	金	江別市立文京台小学校2年生施設見学	28
6		3	9	水	江別市立文京台小学校2年生勾玉作り体験	29
計						194

中学校

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	9	9	水	真駒内養護学校研修旅行（展示見学・ミニチュア土器）	29
計						29

高校

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	6	13	土	札幌啓成高校剣道部施設見学	8
計						8

大 学

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数	
1	平成27	4	15	水	北翔大学短期大学部佐々木先生講義利用	16	
2		4	18	土	北海道教育大札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）	5	
3		4	30	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（専門ゼミA）（展示品を教材にした講義）	5	
4		5	12	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（勾玉作り）	6	
5		5	16	土	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	2	
6		5	19	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	5	
7		5	20	水	札幌学院大学大塚先生講義利用（考古学A）（施設見学）	37	
8		5	21	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（博物館資料論）（施設見学）	8	
9		5	21	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（専門ゼミA）（施設見学）	5	
10		5	26	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	2	
11		5	28	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（博物館資料論）（施設見学）	8	
12		5	31	日	北翔大学短期大学部菊地先生講義利用（選択社会）（施設見学）	11	
13		5	31	日	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	5	
14		6	2	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	4	
15		6	10	水	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	5	
16		6	14	日	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	1	
17		6	16	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	4	
18		6	17	水	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	1	
19		6	20	土	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	3	
20		6	23	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	3	
21		7	14	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	4	
22		7	15	水	札幌学院大学大塚先生講義利用（考古学A）（施設見学）	39	
23		7	23	木	北翔大学佐藤先生講義利用（施設見学）	8	
24		7	28	火	北海道教育大学札幌校今先生講義利用（教育フィールド研究）（あいの里土曜講座準備）	4	
25		9	10	木	東京農業大学網走キャンパス施設見学	30	
26		9	16	木	札幌国際大学越田先生講義利用（施設見学）	23	
27		10	8	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（考古学研究法）（施設見学）	13	
28		10	9	金	札幌学院大学大塚先生講義利用（地域文化史）（施設見学）	22	
29		11	14	土	札幌国際大学山田先生講義利用（施設見学）	4	
30		12	3	木	札幌学院大学大塚先生講義利用（勾玉づくり体験）	5	
31		12	14	月	北翔大学園部先生講義利用（博物館資料保存論）（講義・施設見学）	15	
32		12	15	火	北翔大学短期大学部田口先生講義利用（施設見学・縄文工房利用）	5	
33		平成28	1	23	土	札幌市立大学福岡先生講義利用（博物館資料保存論）（施設見学・勾玉づくり体験）	13
34			2	25	木	藤女子大学太田先生講義利用（施設見学・勾玉作り・砂絵体験）	5
計						326	

教育機関

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	4	23	木	道立教育研究所・道立図書館施設見学	6
2		5	16	土	長沼町教育委員会体験学習（展示室探検ラリー・勾玉作り）	26
3		7	8	水	浜頓別町教育委員会施設見学	5
4		8	22	土	北広島市まちを好きになる市民大学施設見学	13
5		9	1	火	長沼町の史跡を歩く会施設見学	12
6		10	20	火	千歳市立祝梅小学校PTA研修旅行施設見学・縄文工房利用	24
計						86

児童関係の団体

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数	
1	平成27	4	2	木	学童デイサービスあすなろ施設見学・縄文生活体験ひろば利用	26	
2		5	30	土	サンサンキッズ縄文生活体験ひろば利用	11	
3		7	11	土	児童発達支援・放課後等デイサービス輝縄文工房利用	9	
4		7	24	金	こひつじ児童会体験学習（勾玉作り）	38	
5		7	29	水	児童発達支援・放課後等デイサービス輝縄文工房利用	12	
6		7	30	木	大麻西ミニ児童館体験学習（勾玉作り）	18	
7		8	22	土	サンサンキッズ縄文生活縄文工房利用	6	
8		8	29	土	サンサンキッズ縄文生活縄文工房利用	6	
9		9	19	土	厚別区子ども会体験学習（バックヤードツアー・施設見学・火起こし・縄文工房利用）	19	
10		10	16	金	江別市荻ヶ岡児童センター縄文工房利用	15	
11		11	3	火	こどもサポートユニモ北郷施設見学・縄文工房利用	11	
12		11	20	金	児童通所支援センタークオレ文京台縄文工房利用	9	
13		12	19	土	児童通所支援センタークオレ月寒縄文工房利用	10	
14		平成28	1	7	木	こどもサポートユニモ北郷施設見学・縄文工房利用	18
15			1	8	金	サンサンキッズ施設見学・勾玉づくり	31
16			1	12	火	ベストフレンズ勾玉づくり・縄文工房利用	35
17			1	16	土	児童通所支援事業所ぶんぶん施設見学・縄文工房利用	10
18			3	5	土	児童発達支援・放課後等デイサービスきずな大麻施設見学・縄文工房利用	12
19		3	18	金	児童発達支援・放課後等デイサービス輝施設見学・縄文工房利用	9	

20		3	19	土	児童発達支援事業所めばえ施設見学・縄文工房利用	8
21		3	26	土	児童発達支援・放課後等デイサービスきずな大麻施設見学・縄文工房利用	5
22		3	26	土	児童発達支援・放課後等デイサービス輝施設見学・縄文工房利用	6
23		3	30	水	児童発達支援・放課後等デイサービスきずな大麻施設見学・縄文工房利用	13
24		3	30	水	児童通所支援事業所あじさい2施設見学・縄文工房利用	20
25		3	30	水	児童発達支援・放課後等デイサービスきずな見晴台施設見学・縄文工房利用	19
計						376

高齢者関係の団体

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	4	23	木	小規模多目的ホームみのりの丘砂絵体験	16
2		5	21	木	ツクイ江別デイサービスセンター縄文生活体験ひろば利用	5
3		5	29	金	あるての杜施設見学	23
4		5	31	日	デイサービス結いの家施設見学・縄文工房利用	8
5		6	2	火	デイサービスセンターふくろうの森施設見学	12
6		6	10	水	デイサービス結いの家施設見学・縄文工房利用	8
7		6	23	火	大麻北栄クラブ施設見学	33
8		7	18	土	デイサービスみずばしょう施設見学	6
9		7	22	水	デイサービスセンターこんふおーと施設見学	10
10		8	27	木	江別市聚楽学園施設見学・勾玉作り体験	54
11		9	1	火	地域包括ケアセンター福住サテライトごきげんふくずみ施設見学	14
12		9	4	金	デイサービスセンター夢美はな施設見学・縄文工房利用	12
13		11	11	水	デイサービス結いの家施設見学	13
14		11	12	木	デイサービスセンターみのりの丘野幌施設見学・縄文工房利用	17
15		11	13	金	デイサービスセンターみのりの丘野幌施設見学・縄文工房利用	33
16		11	21	土	小規模多機能型居宅介護「ごきげん」月寒東施設見学	10
17		12	8	火	江別ケアパークそよ風施設見学・縄文工房利用	23
18	平成28	1	14	木	デイサービス夢美はな施設見学・縄文工房利用	8
19		1	21	木	デイサービス夢美はな施設見学・縄文工房利用	7
20		1	28	木	デイサービス夢美はな施設見学・縄文工房利用	9
21		2	16	火	江別ケアパークそよ風施設見学・縄文工房利用	15
22		3	8	火	江別ケアパークそよ風施設見学・縄文工房利用	14
23		3	13	日	社会福祉法人はるにれの里レラもうらい施設見学・縄文工房利用	6
24		3	17	木	デイサービス結いの家施設見学・縄文工房利用	4
25		3	29	火	デイサービス結いの家施設見学・縄文工房利用	16
26		3	30	水	聖陵デイサービスセンター施設見学・縄文工房利用	10
計						386

社会福祉関係の団体

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	10	2	金	江別すずらん病院デイケア施設見学・縄文工房利用	6
2		11	7	土	さぼーとセンターこねくと施設見学	10
計						16

近隣住民の団体

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	6	27	土	大麻沢町16丁目自治会歩こう会施設利用	64
2		9	17	木	厚別南町町内会連合会女性部施設見学	27
計						91

その他の団体

	年	月	日	曜日	団体名・見学・体験等	参加人数
1	平成27	6	20	土	福島町議会議員施設見学	13
2		7	17	金	全埋協コンピュータ等研究委員会施設見学	14
3		7	26	日	歩こう会施設見学	30
4		8	2	日	日本ボーイスカウト旭川第一団施設見学・縄文工房利用	6
5		10	17	土	シーブツアーズ施設見学	11
6		11	10	火	日本植生史学会施設見学	29
7		11	25	水	鹿追町熟年会施設見学	20
8	平成28	2	4	木	自然ふれあい交流館観察会「冬の森をかんじきで歩こう」施設見学	12
計						135

団体利用者計						1,679
--------	--	--	--	--	--	-------

7 講演会要旨

(1) 夏季講演会

『DNAからみたヒグマの系譜—世界に発信！
考古学と分子系統学のコラボレーション』

講師：増田 隆一 氏

(北海道大学大学院理学研究院教授)

<はじめに>

ご紹介いただきました北海道大学の増田です。所属は理学部生物科学科で、動物の進化について研究をしています。

今回は、「DNAからみたヒグマの系譜」という演題でヒグマを中心としながら、私の研究対象としているその他の動物についてもお話をさせていただきます。



<クマと聞けば…>

みなさん、クマと聞けば、「恐ろしい」というイメージが最初に出てくるのではないのでしょうか。

クマのイメージも地域で異なります。

本州ではツキノワグマ。金太郎がクマにまたがっているシーンを思い浮かべる人もいるかもしれませんが。それに対して、北海道では、クマといえばヒグマ。サケを手にした木彫りのクマが有名で、お土産屋さんでは、サケを笹に刺して、背負っているものがあつたりします。

<世界のクマ分布>

日本全体では、ヒグマよりツキノワグマの方がポピュラーですが、世界的にみると少し様相は違うようです。テディーベアーやクマのプーさんは、世界的なキャラクターですが、実はこの2つは、ヒグマがモデルなのです！

<世界のヒグマとツキノワグマの分布>

では、どうしてこのようなキャラクターが生まれてくるのでしょうか？それはヒグマの広い分布域が原因といえます。

日本列島に限りますと、ヒグマは北海道のみ生息しているのですが、広く北半球をみますと、ユーラシア大陸から北米大陸にかけて、広くヒグマが生息しています。

それに対して、ツキノワグマが生息している地域は、世界的にみると限られており、日本の本州、四国、九州（九州は、ほとんど絶滅してしまっていると考えられています）。朝鮮半島から台湾、東南アジアまで。日本海を挟んだ対岸の沿海州まで、ヒグマとツキノワグマが共存する地域になっています。

<ブラキストン線>

日本列島では、津軽海峡がツキノワグマとヒグマの分布境界線になっており、動物地理学の境界線では、ブラキストン線とよばれています。ブラキストン線は、北方系の動物と南方系の動物の分布境界線であるといえます。その例のひとつとして、ヒグマとツキノワグマの分布があげられます。

<クマ 広がる行動域>

北海道のヒグマに話を戻したいと思います。

私たちの生活においては、ヒグマはかわいいキャラクターのイメージだけではなく、山であつたら怖い動物のイメージをもっています。私もクマを研究対象にしていますが、山で偶然出会いたくない動物です。

残念ながら、北海道全域で、毎年、死傷事件が起こっています。北海道全域に生息しているので、どうしても山菜取りなどで、山間に入った人間と遭遇する機会も多くなります。

逆に考えると、それだけ北海道は、自然が残されているともいえるでしょう。

<頭蓋骨計測からみた地域差>

DNAの分析により、北海道に生息しているヒグマに関する種々の特徴が、明らかになりつつあります。

それ以前にも解明されていた研究成果があります。この研究は、現在北海道大学低温科学研究所に所属している大館智志さんが学生の時に研究発表したもので、ヒグマの形態に地域差があるかを

調べたものです。

400頭以上のヒグマ頭蓋骨のさまざまな部位を計測し、北海道を南部、中央部、北東部の3つにわけ、それぞれの地域で違いがあるかどうかを検証しました。

クマはオスとメスとで形態に大きな違いがあります。このことを「性的二形」といいます。

一般的に、哺乳類の場合、頭のサイズが大きいと、体のサイズも大きいことを意味します。いろいろな計測部位を比較して、数値が大きいものは、体も大きいといえます。大館さんたちの研究では、頭骨の長さ、幅、脳室（脳の入るスペース）の高さ、歯の大きさなどを調べて、統計的に処理をし、グラフに表しました。

オスとメスの間で違いもありますので、オスとメスをわけて統計処理をしています。横軸は年齢、縦軸は計測値になります。

どの結果も、北東部が大きく、次に中央部、最後に南部という順になることがわかります。この結果は、体の大きさが北東部で最も大きく、次に中央部、最後に南部という順になることがわかります。

<歯の年輪>

クマの年齢は、歯の年輪から推定することができます。

現在では、第4前臼歯の歯根部の年輪を調べることができるになっています。歯を引き抜き、スライスし、特殊な染色液で染めて、顕微鏡で観察します。そうすると、縞模様がみられます。

歯も骨と同じように成長を続けていまして、歯根部の表面に向かって成長がすすんでいきます。夏は、いろいろな食物を摂取しますので、年輪の成長がすすみ、冬は冬眠するため、年輪の成長が遅いという特徴があります。

クマは、10歳くらいになると、大きさにかかわる成長が止まることがわかっています。

歯の年輪も、20歳くらいで概ね止まり、それ以降は年輪の幅がかなり狭まりカウントしにくくなり、正確な年齢がわからなくなります。

<DNAからみたクマ>

生物の進化を調べる上で、なぜDNAを調べるのか。それは、DNAが親から子供に伝えられる唯一の物質だからです。

DNAとは、生物の遺伝情報が描かれている設計図のようなものです。その情報がmRNAという物質に伝えられ（転写）、さらにタンパク質に変換（翻訳）され、酵素反応（エネルギー保存）や分子認識や細胞を形作ることに携わっています。その情報の源は、DNAにあるわけです。

DNAは、同じものを作り出す自己複製という機能をもっていますが、DNAが少しずつ変化することで進化が起こることになります。

自己複製、種々の代謝反応、進化が生命活動の基礎になっているといえます。

その中で、DNAは親から子に伝えられる唯一の物質です。それによって、例えば人間からは人間の子供が生まれますし、ライオンからはライオンの子供が生まれるのです。

活力を生む、繁殖する、進化する。私たちの生命活動は、この3つのどれかに分類することができます。

<ベルクマンの法則>

ヒグマの形態的な特徴は、北のヒグマが大きくて、南のヒグマが小さいということです。これは「ベルクマンの法則」に従った進化を示していると考えられます。この法則は、寒冷地の恒温動物が、体のサイズを大きくすることにより、体重あたりの体表面積を小さくして熱放散を防ぎ、寒冷気候に適応していると考えられるものです。これには物理的な法則性がありまして、薬缶の水を沸騰させた場合、大きな薬缶の方が小さな薬缶よりさめにくいということを皆さんも経験的に知っていると思います。

北海道のような小さな島に生息するヒグマ集団でも、この規則がみられるのです。

<ヒグマのミトコンドリアDNA分析>

私たちは北海道各地のヒグマを分析し、HB-01からHB-17までの、17種類のミトコンドリアDNAタイプをみつけました。それらを比較して何

%くらい遺伝情報が違うかを、調べました。

その結果、統計的に90%から100%の確からしきで3つのグループに分かれることがわかりました。

この3グループは道南地域、道央・道北部、道東部に分布し、その境界線が明瞭にわかれることがわかりました。私たちはその分布パターンを北海道ヒグマの三重構造と名づけました。

それがどのような歴史をもって形成されたのか。現在も研究は継続中です。それぞれの地域に適応して、この3つのグループが住んでいるのではないかと考えています。

<ミトコンドリアDNAとは>

私たちが調べたのは、ミトコンドリアDNAという遺伝子です。ミトコンドリアDNAとは、お母さんから子どもに遺伝する母系遺伝の遺伝子です。

哺乳類の配偶子が受精する際、母親の卵があり、核(n)のまわりに細胞質(ミトコンドリアを含む)が存在します。子供に伝わっていくのは、母親由来のミトコンドリアDNAになります。

一方、父親由来の精子がありますが、頭部(核DNA)と中片部(ミトコンドリアを含む)と尾部にわかれ、中片部にもミトコンドリアDNAがあります。

この精子が卵に入ってくると、中片部のミトコンドリアDNAは溶けてなくなってしまうことがネズミを使った実験でわかっています。

そのため、ミトコンドリアDNAを調べるということは、母親由来のミトコンドリアDNAを調べることになるのです。

<ヒグマ集団間のミトコンドリアDNA拡散様式>

ヒグマの三重構造の成立過程は、まだ解明できていないところがあるのですが、遺伝情報がどのように3グループで維持されているのかを考えてみます。

オスとメスのヒグマがそれぞれの地域で交配しています。交配すると子どもが生まれます。

3グループそれぞれが分布しているエリアでは、それぞれのミトコンドリアDNAが伝えられ

ていきます。

ヒグマのオスには、非常に行動範囲が広いという特徴があります。電波発信器を取り付けた生態調査により、一晩で支笏湖周辺から夕張までの数十キロを移動したヒグマがいたことが知られています。

それに対して、メスは非常に狭い範囲での移動しかしません。自身の母親のなわばり周辺で、数キロ程度の範囲でなわばりをもつことになります。

オスが仮に別の地域に入り込んで交配しても、ミトコンドリアDNAは母系由来なので、子供にはその土地の母親のミトコンドリアDNAしか伝わりません。

また、クマは冬眠しますので、自分のエリアでエサが足りなくなり、他の地域まで移動するというケースも少ないと考えられます。

<海外におけるヒグマ分布の研究>

クマの分布域が広いというお話をしましたが、日本の研究者だけではなく、海外の研究者もクマの研究を行っています。

フランスの研究者グループが、同じミトコンドリアDNAを使って、分析結果を発表しています。

ヨーロッパの分析でも、大きく3つのグループに分かれることがわかっています。

ひとつは、ロシア、スカンジナビア半島北部、バルカン半島の北部のヒグマで構成される東ヨーロッパグループです。

さらに西ヨーロッパグループは、イベリアグループとバルカングループにわけられます。

西ヨーロッパにも17世紀までは生息していたようなのですが、生息地が縮小し、現在は絶滅してしまいました。

北海道は、アイルランドと同じくらいの面積をもつ、非常に小さな島ですが、そこに3つのグループが分布していることは、世界的なレベルでのヒグマ研究からみても、北海道は重要なフィールドであることを示しています。

<世界のヒグマミトコンドリアDNA解析>

さきほどのミトコンドリアDNAの調査では、わずかな範囲の読み取りで3重構造の成果を導き

出しましたが、実際には、17,000個ほどの塩基で情報が描かれています。

私の研究室で、これらの結果をもう少し詳しく調べてみようということになり、遺伝子情報すべてを解読して、世界のヒグマと北海道のヒグマを比較してみようという試みをしました。

大学院生の平田大祐君が取り組んだ研究成果ですが、このような系統樹を描くことができました。

道南、道東、道央の3つのグループに東ヨーロッパと西アラスカのヒグマを含めたものが東系統のグループになります。

さらにヨーロッパのヒグマを中心にした西系統のグループにわかれます。

一方、ホッキョクグマは別種になるのですが、遺伝情報を解読してみるとヒグマの中のひとつのグループに含めることができるようです。

道南のクマは、ロッキー山脈に生息するヒグマと同じグループになり、道央のヒグマは、スカンジナビア北部や西アラスカのグループと同じグループになることがわかりました。

<ヒグマはどこから来たのか？>

ヒグマが北から来たのか、南から来たのかは、未だ私の宿題になっております。

少なくとも北海道のヒグマの祖先は、ユーラシア大陸にあるだろうということにはわかってきています。大陸で3つのグループにわかれたヒグマが、3回にわたって北海道に渡ってきたのではないかと、私たちは推察しています。

大陸のヒグマと北海道のヒグマを比較して研究しているのですが、今のところわかっていることは、道南のヒグマはロッキー山脈のヒグマと近いグループであること。

ユーラシア大陸を出発し、日本へ到達したグループとベーリング海峡をわたりロッキー山脈へ到達したグループがあるのだろうと考えます。

道東のヒグマとして、知床、国後、そして択捉のヒグマがいます。このグループは、東アラスカのヒグマと近いことがわかっています。ユーラシア大陸に2つのグループがあり、二手にわかれて一方が北海道に到達しました。

道央のヒグマグループは、ユーラシア大陸に広

く分布しております。また、西アラスカにも分布しています。この道央グループは、最終氷期が終了し、森林が広がっていくのに合わせて、北海道に到達したものと考えます。

ヒグマは森林性の動物ですので、針葉樹林帯があるところに生息します。ヒグマをたどることによって、過去の針葉樹林の分布もまた確認できることになります。

ヒグマ集団が形成された場所は、おそらくユーラシア大陸のどこかにあるのだろうと考えられます。北京原人が発見された約40万年前の周口店の洞窟では、ヒグマの骨も発見されています。

<レフュージア>

レフュージアとは、避難所という意味です。

地球の歴史をみると、氷期と間氷期が交互にやってきています。氷期は、北極に近ければ近いほど寒く、動物集団が南へ移動をしていったのだろうと考えられています。間氷期が訪れ、暖かくなると、南から北へ生物の分布が移動していく。徐々に現在の生物の生息域が確立していきました。

ヒグマに関しては、複数の氷期レフュージアがあったのではないかと考えられています。

これらの状況を確認していくためには、現在のヒグマだけでは研究をすすめることができず、過去のヒグマも対象にしていく必要があります。

化石に残されているDNAを採取するのは、非常に難しいため、いろいろな取り組みをしているところです。その一つとして、次に紹介する分析方法を開発することにしました。

<新しいDNA分析法>

今回もミトコンドリアDNAの全遺伝情報を対象にしました。新鮮な血液と新鮮な組織を分析できるのであれば、時間をかければこのようにすべての塩基を対象にすることはできます。

古い骨からDNAを抽出すると、DNAが断片化していて、やはり欠落してしまう情報もあります。

そのため壊れたDNAからでもミトコンドリアDNA全体の情報を得る分析法を確立しようと考

えました。

全世界のヒグマのDNAを分析したところ、ところどころ重要な塩基情報があることがわかってきました。たとえば、ユーラシアの西系統と東系統をわけるのは、約17,000ある塩基の中で、7,257番目の塩基に差がありました。西系統が7257T、東系統が7257Cになり、TとCの違いで分けられました。

道南のヒグマは、10116G、道東のヒグマは、8392A、道央のヒグマは、9271Cの遺伝情報をもつことがわかりました。

これらのキーになる情報を抽出できれば、すべての遺伝子情報が読み取れない場合でも、グループ分けができるようになりました。

<遺伝子増幅法（PCR法）>

使用する実験方法は、遺伝子増幅法（PCR法）といいますが、微量の情報を分析可能なところまで増幅できるものです。その際に使う重要なプライマーという試薬があります。そして、温度を下げたりあげたりすることで、人工的に分析対象のDNA領域を合成していきます。

PCR法で増幅された情報を電気泳動にかけます。板状の寒天の上に、増幅した遺伝子をのせ、電気力で移動させます。

ロシアの研究者と共同研究をすすめており、100年以上前にユーラシアを調査した探検家が集めたコレクションからDNAを抽出し、分析を行っています。

道東のヒグマは、東アラスカと近いグループになるのですがベーリング海峡をわたりアラスカに到達したものと、道東に到達したものがあるのだと思います。おそらくユーラシア大陸にもこのグループのものが残存しているのではないかという仮説をたて、この新しい技術で分析をしてみたところ、アルタイ山脈とコーカサス山脈にこのグループと近いグループをみつけることができました。

これは、更新世におけるヒグマの氷期レフュージアであった可能性があると考えます。

道央地域のヒグマについては、東ヨーロッパから西アラスカの系統に近いことはわかっています。

たが、今回の方法で調べてみると西ロシア付近からカムチャッカ半島までの広範囲に分布していることが確認されました。

<不可欠なフィールドワーク>

遺伝情報が刻まれているDNAは目にみえないので、実験室でいろいろな機械の力を借りて分析を行っています。しかし、自分が研究している動物が、どのような生息環境にいるのか、フィールドに出て観察することは非常に大切なので、1年に数回、ヒグマの生息域に調査に出かけます。今回は、ロシアのウラル山脈付近で調査を行ったことをお話しします。

この調査は、私と数名の大学院生が、ロシア研究者のフィールド調査に参加し、シベリアの山中で数日間テント生活を送りながら、洞窟の中に入り古い骨を探す作業をいたしました。

調査地点までボートをチャーターし移動しました。ウラル山脈からはいろいろな鉱物も採取され、石灰岩の大きな岩盤もみられます。川沿いにも石灰岩がくりぬかれたように鍾乳石の洞窟が点在しています。

洞窟の入口は大変狭く、私はちょっと入るのが怖かったのですが、学生たちは喜んで入って行きました。研究者というよりは洞窟の探検家の様相です。中は3キロほど続いており、鍾乳石が天井部から降りていました。

屋外には、おびただしい数の蚊がいて、ものすごく大変だったのですが、洞窟の中に入ると、ひんやりして、快適な状態でした。ただ、中は真っ暗なので、ヘッドライトの明かりが頼りでした。

そのような中で地層を掘り進めていくと、旧石器時代のヒグマ下顎骨など、かなりたくさんのクマの骨が発掘されました。これは人為的に持ち込まれたものではなく、冬眠中に死亡したり、雨水でここに流れ着いたものと考えられます。

今回の調査では、発見できなかったのですが、ホラアナグマという絶滅種の骨もウラル山脈では採取されることがあります。ホラアナグマには、ヒグマと同じく「性的二形」があり、オスとメスでは形態が異なります。3万年前に死滅したと考えられる種で、ウラル山脈の現生のヒグマ骨と比

べて大きなクマであるということがわかります。

<過去のヒグマについての調査>

日本国内では、現生のヒグマだけではなく、考古学が対象とする過去のヒグマについての調査もお手伝いさせていただいています。

過去のヒグマについては、DNAの分析法を行う以前にも着目されていました。

シカの骨で作ったスプーンの柄に、ヒグマの意匠をつけたものやクマをかたどった牙製品や土器の把手にクマ意匠がついたものなどが遺跡からの出土品にみられます。

<イオマンテ（クマ送り）の絵図>

アイヌのひとたちは、ヒグマを山の神様と考えています。アイヌ文化には魂を山に送り返すという儀礼（イオマンテ クマ送り）があります。

儀礼に使用する仔グマを飼育することで、イオマンテを行う期日を周囲の集落に知らせることができる。それによって、集団のつながりを強めることができる重要な役割を担っていたと考えられています。

<飼育型クマ送りの起源>

クマ送りの歴史を考えると、誰が、いつ、どこでという、考古学的にも重要な問題があります。

本州と北海道の歴史区分は違っていて、縄文までは同じですが、続縄文、擦文、アイヌ文化期、あわせて続縄文と擦文に並行したオホーツク文化期という区分があります。

オホーツク文化期の遺跡からクマの骨が多数みつかります。有名なところでは、礼文町香深井A遺跡や網走市モヨロ貝塚などがありますが、道立埋文センターが調査した奥尻町青苗砂丘遺跡でも出土しています。

礼文町香深井A遺跡は、北海道大学北方文化研究施設が調査しました。遺跡からは、頭の骨が集められ、儀礼を行ったと考えられる骨塚がみつかっています。現在も過去にも、礼文島にはヒグマは自然分布していないと考えられています。

香深井A遺跡出土のヒグマ頭骨には丸い穴があけられています。オホーツク文化期にはヒグマの

頭を利用した儀礼があったのではないかと考えられます。

道立埋文センターが調査した奥尻町青苗砂丘遺跡では、クマの下顎骨がみつかっています。礼文島と同じく奥尻島にもヒグマが分布していません。どこからか持ち込まれた可能性を探るべく、北海道本島のクマと比較するDNA分析を行いました。

<DNAの分析方法>

それではどのように実験室で作業をしているのか説明いたします。

まず、電気ドリルにより、出土骨から骨粉を採取します。今回の場合、ヒグマの中手骨から約0.1から0.2gの骨粉を採取しました。

次にEDTAというカルシウムを吸着させるキレート剤の溶液に入れ、1晩、ローターでかき混ぜます。そうすると、骨の中のカルシウム分が吸着されて、残渣が残ります。

そこからさらにタンパク質や脂質を取り除く作業を行います。その際にフェノールという有機溶剤を利用します。フェノールは人が吸うと害になりますので、ドラフトチャンバーを利用して有害成分をきれいにしながら室外に排出し作業をします。

そのあと、遺伝子増幅装置（PCR）に入れます。その中から注目する遺伝子情報を確認していきます。PCR産物のアガロースゲル電気泳動を行います。サンプル列1、2、3は反応しているので作業が成功していることがわかります。サンプル列4、5には、何も映っていませんので、この2点からはDNAが抽出できなかったことがわかります。

うまくDNAが採取された場合には、その後、自動シーケンサによって塩基配列を解読します。

<2つのグループ>

自動シーケンサによって読み取られた塩基配列は、ACGTの4つの記号の配列として記録されます。礼文島でみつかったクマは、道北・道央部グループと道南グループの2グループのクマであることがわかりました。

奥尻島の遺跡から発見されるヒグマは、S2、S3という道南グループに含まれることがわかりました。

ヒグマは、歯により年齢を推定することができます。

礼文島のヒグマに話を戻します。1歳未満に死亡している仔グマは、すべて秋に死亡していることがわかりました。DNA分析から、そのうち3個体は、道南から持ち込まれていることがわかりました。2歳以上のクマはすべて春に死亡したもので、道北道央グループのものでした。

この結果を考古学の先生方とディスカッションしました。

<香深井A遺跡出土骨分析の結果>

オホーツク文化圏の道北地方は、道北道央グループで成獣8頭は、春に死亡しており、狩猟型のクマ送りを行った可能性があります。春クマ猟で捕獲し儀礼に使う。仔グマ1頭は秋の死亡については、飼育型クマ送りで、春クマ猟で仔グマを捕獲した後、秋まで飼育し儀礼に使ったものであろうと考えられました。

続縄文・擦文文化圏の道南エリア（積丹半島から支笏周辺）のDNAタイプが、仔グマ3頭に共有されていました。これらの仔グマは秋に死亡し、飼育型クマ送りに利用されたものと考えました。

道北・道央エリアと礼文島との関係を考えてみると、クマ送りが同じオホーツク文化圏のきずなを強めるために行われていたものでしょう。

また、道南エリアと礼文島との関係においては、仔グマのクマ送りがオホーツク文化と続縄文・擦文文化の異文化間の交流、その絆を強めるために、行われたことが示唆されます。

DNAのレベルでは、道南で春に獲得したクマを礼文島に持っていき秋まで飼育したのか、道南で春に獲得したクマを道南で秋まで飼育した後に礼文島に連れていったのかは、判断ができません。

今回の分析では、仔グマ型クマ送りは、オホーツク文化期には始まっていたこと。オホーツク文化と続縄文、擦文文化との間には、仔グマに対する価値観の共有があったのではないかということ、などを考察できました。

<エゾシカの遺伝的構造、遺伝的集団構造>

クマの話はここまでなのですが、せっかくの機会なので、エゾシカについて、この後お話しさせていただきます。

道庁と協力して、シカの遺伝的構造、遺伝的集団構造を調べようと調査した結果です。日本列島のシカは、ニホンジカに分類される1種なのですが、2つのグループに分かれることが今回の調査で始めて確認されました。

<エゾシカのグループ分け>

ミトコンドリアDNA分析により、北日本グループと南日本グループに分かれ、エゾシカは北日本グループに属することが明らかになりました。

さらに、エゾシカのグループから6つの遺伝子タイプが見つかり、その中の3つのタイプの分布が特に際立っています。1つは、阿寒の針葉樹林帯に生息する阿寒グループ、2つめが大雪の針葉樹林帯に生息する大雪グループ、3つめが日高針葉樹林帯に生息する日高グループになります。

シカの場合には、冬眠をせず、オスもメスも遠距離移動してしまうため、グループ間の境界線がはっきりと出てこない分布になります。

<エゾシカの生息調査>

針葉樹林帯、広葉樹林帯、平地（草原）に区分けすると、夏は、草を食みに草原地帯に出ることが多いのですが、冬は、針葉樹林帯中の方が積雪量も少ないので、クマザサなどを食べながら生息することが多いようです。

実際の生息数は、把握できないので、各年の捕獲数で増減が推定されます。

道庁の過去の調査記録によると、明治以前は、個体数が多く、1879年と1881年は大雪のため、エゾシカが激減したことがわかっています。

また、本州からの入植者があったため、狩猟圧がかかったことも考えられます。

一時、禁猟であった時代があり、阿寒、大雪、日高の針葉樹林帯で細々と生息していました。

＜明治以前のエゾシカの集団構造＞

それでは、明治以前の集団構造はどうであったのか。道内の遺跡から発掘され、博物館や資料館に所蔵されているシカの骨を分析いたしました。

今回確認できたことは、阿寒タイプは、明治以前にも多くいたこと。大雪タイプは明治以前にはあまり分布しておらず、石狩低地帯に少数いたタイプであったこと。日高タイプは、現在と同じく日高に分布しているものもあったけれども、明治以前には、知床付近にもまとまったグループがいたことがわかりました。

これらの結果から考えると、明治初期の大雪によるエゾシカの個体数減少により、それ以前の分布とは異なる分布パターンが生まれたのではないかと考えられます。

個体数が何らかの原因で減少し再び増加することをボトルネックとよびます。

今回の結果から、明治初期に起こったボトルネックにより、3つの遺伝子タイプは死滅してしまったと思われます。そのあと、6つのタイプが残っているのですが、集団構造も大きく変わってしまったのです。

ボトルネックの際、個体数が少なくなればなるほど、次世代での集団構造は大きく変化してしまうこととなります。このことを遺伝的浮動（genetic drift）といいます。

＜絶滅危惧種 シマフクロウ＞

ボトルネックにおける遺伝的浮動（genetic drift）の影響は、現在、絶滅危惧種になっているシマフクロウでもみられます。

シマフクロウも明治以前、アイヌの人たちの文化に溶け込んでいて、ムラの神様として、フクロウ送りの儀式が行われていたことがアイヌ絵などの資料にも残っています。

以前は広く分布していましたが、1980年代にボトルネックがあり、現在は道東と日高地方で約140個体が生息していると考えられています。

個体数が減少すると、遺伝的多様性が低下し、適応力が低下することになります。種や集団の維持にとってよくない条件がそろうこととなります。

＜生態系の傘種＞

シマフクロウは、魚が豊富な河川を有する原生林に分布しており、その環境は、非常に豊かで、シマフクロウが生息できるような環境であれば、他の動物も生息できるということになります。

そのことからシマフクロウは、生態系の傘種（アンブレラ・スピーシーズ）といわれます。豊富な生態系を維持しているバロメーターなのです。

＜シマフクロウのDNAを分析する＞

シマフクロウについては、様々な保護対策が施されています。獣医さんがシマフクロウを一時的に捕獲し、採血をしたり、健康診断をしたりしています。健康診断で採取した血液の一部を提供してもらい、DNA分析に供しています。以前は、細胞の一部を採取して培養していました。そのため、北海道大学では、1980年代から液体窒素を使って、シマフクロウの細胞を冷凍保存していました。

そのように古い冷凍細胞と新しい標本とを利用して分析を行いました。

＜シマフクロウのグループ分け＞

シマフクロウのミトコンドリアDNAにおいて5つのタイプが見つかっています。1980年以前は、いろいろなグループが北海道の広い範囲に生息していたのですが、2000年以降は、それぞれのグループ集団で遺伝的な分化や多様性の低下が生じつつあります。

シマフクロウに関しては、研究で明らかになった知見を種の保全や環境保全に役立ててほしいと考えています。

(2) 秋季講演会

『考古学と文献史学

—新しい関係構築をめざして—

講師：桜井 英治 氏

(東京大学大学院総合文化研究科教授)

<はじめに>

私の専門は、日本中世史で、とくに室町、戦国時代の社会経済史、流通経済史が主な研究内容です。

実は今でこそ日本史を研究していますが、大学時代は考古学をかじっており、大学院から専攻を日本史に変えたのです。今回このようなテーマで話をするには適任だろう、ということでご講演の依頼をいただきました。



<日本史と考古学>

ごく簡単にまとめると、日本史とは文字で書かれた史料を主に扱う学問。文献史料を扱うということでは、日本史も東洋史、西洋史も一緒です。

それに対して、考古学は、出土資料、遺構や遺物を対象に歴史を解明していく学問といえます。

同じ「しりょう」でも文字が違う(「史料」と「資料」)わけです。

場合によっては、木簡のように、考古学的な資料に文字が刻まれて、史料の意味合いをもつものもあります。

日本史と考古学は、扱う史資料は違いますが、歴史を解明していくという究極の目標では同じです。しかし手段や材料が違えば、やはり方法論も違うわけで、異なる訓練が必要になります。

<中世考古学の黎明期>

古代史は、長年の協力関係がありますので、日本史と考古学の関係も、協力することが当たり前という良好な関係を築いていると思います。

問題は次の中世史です。

私が学部生の頃は、福井県にある朝倉氏の居館

跡である一乗谷遺跡や、広島県の、今は失われてしまいましたが、港湾都市の跡である草戸千軒遺跡、鎌倉市内における中世の遺跡調査などが始まっていた時期でした。

中世考古学という言葉もそろそろ使われはじめていました。まだ、このころは、各地で拠点的な遺跡がいくつか調査されている段階で、全国的にみますと、まだまだ中世が考古学的な調査対象になる、ということは少なかった。

中世の城跡だとわかっている遺跡であったのに、中世の層準を表土として飛ばしてしまうことがあり、また、中世の陶磁器について判断できる人が少なかったので、出土資料についても適切な判断をできないことがありました。

現在は、調査精度もあがり、どの自治体の調査でも中世はきちんと調査の対象となっております。

また、さらに時代のあたらしい近世考古学や近代の産業考古学など、新たな分野も開拓されています。

<考古学との出会い>

私個人のことをもう少しお話ししますと、大学1年生の時に、高校の友人に誘われ、発掘調査のアルバイトに行きました。そこで発掘調査の楽しさを知りました。当時はまだ新しかった中世考古学に関わる機会を得たわけです。

大学3年生で学部を決める際、日本史にしようか、考古学にしようか、かなり迷いましたが、考古学を選びました。

<考古学研究室の思い出>

ところがこれが失敗。東京大学の考古学研究室は、バリバリの先史考古学を対象としており、特に中東やシベリアを対象に研究している人が多く在籍されていました。

そのなかに私をかわいがってくれる先輩がいて、いろいろな発掘調査に連れて行っていただきましたが、桜井にはぜひ縄文をやってほしいという期待が周囲から高まってきて、このまま大学院以降残ることになっても、なかなか中世考古学には携わることができないのではないか、という状況に

なってきました。

今は多少状況が変わってきていると思うのですが、当時は縄文の研究といえば、主に縄文土器の編年にかかわる研究で、それが自分の性分と合わないところがありました。良い面もあったのですが、大学院進学の際に、考古学研究室でなく、日本史研究室に移りました。

<日本史研究室へ>

考古学から日本史研究室への転科は、最初苦労が伴いました。最初に述べたように、扱う史料が違いますから、それに合わせた研究法を身に着けなければならなかったためです。

中世考古学をやるためには、文書も読めなければだめだと思い、古文書関連の講義は学部の頃から受講しておりました。そのおかげで大学院入学当初は、かろうじてついていけたというのが正直なところでした。

大学院で指導していただいたのは、のちに国立歴史民俗博物館の館長も務められた石井進先生です。石井先生は、文献史学サイドから中世考古学の必要性を訴えていた方です。先生は、中世国家史がご専門の、正統派の中世史研究者でしたが、鎌倉の都市史や社会史に関心を寄せられ、その解明のためには考古学の調査が不可欠であると考えられていました。

当時、石井先生は、文献史学の限界ということをしきりにおっしゃっていて、今後の中世史研究には、考古学をはじめとして、民俗学、地理学など隣接する分野の研究成果も取り込んでいかなければ先細りになってしまうのではないかと憂慮されていました。

私のような考古崩れを大学院に採ってくださったのも、中世考古学の分野でも活躍してほしいという期待があったのではないかと推察しています。

残念ながら、いまだにその面では期待に応えておらず、忸怩たる思いがあります。

<山梨県黒川金山の概要>

戦国時代の鉱山では、世界遺産に登録された石見銀山をはじめとして、同じ山梨県でも湯之奥金

山がありますが、黒川金山の調査は、それらの調査に先駆けて行われた貴重な事例といえます。

ちなみに1997年に黒川金山と湯之奥金山を合わせて甲斐金山遺跡として、国指定史跡に指定されました。

黒川金山は、戦国大名武田氏の金山として一番有名なところでした。山梨県の北東部、標高1,716メートルの鶏冠山の東側の谷に所在します。調査当時は山梨県塩山市でしたが、現在平成の市町村合併の結果、甲州市となっています。

この金山を1986年から1989年まで毎年夏1か月間、4年間にわたり調査しており、私は第3次調査まで参加しました。最後の第4次調査は、同年北大に赴任したため、参加できませんでした。

私にとって、博士課程の3年間は、毎年、夏の暑い時期、1か月を鬱蒼たるジメジメとした黒川の山中で過ごしたのです。

<今村啓爾先生>

私たちの発掘調査を指揮したのは、当時東大の考古学研究室助手でいらした今村啓爾先生です。皆さんは縄文時代の研究者としてよくご存じの方だと思います。

ご本人の言葉によると、今村先生は、1978年に初めて現地を訪れ、その壮大さに心打たれ、いつかここを調査するのだと執念を燃やされたそうです。資金面でも活発に動かれ、三菱財団や読売新聞社などから助成金をもらいました。

このように公共事業に伴わない独自の調査を自主発掘とよびますが、発掘の調査法としては理想的なやり方といわれます。

この時は、すでに考古学から逃げ出した私も捕まってしまいました。今村先生には「うまく逃げられたと思ったら、大間違いだよ(笑)」といわれたのを、今でも覚えています。

<過酷な発掘調査>

調査の中心は東大と学習院の学生で、少ない時は15名程度、多い時には30名程度調査に従事していました。

調査の方法は、麓のバンガローにベースキャン

ブを置き、そこからスタートです。その高さで、すでに標高1000mありました。ここから1時間半くらい山を登ったり下ったりして、発掘調査現場まで徒歩で向かいました。

現地は沢沿いで、真っ直ぐ進むと鶏冠山の山頂に通じていました。このあたりは標高1180m、遺跡の最高地点は1390m、標高差が210mもある過酷な現場でした。水平距離では上下600m、その範囲に平場が約300個ありました。

昔、非常に栄えていて、現在は衰退し、昔の面影が残っていないようなところを千軒とよぶことがあります。この黒川千軒もその例です。このエリアは、平場だけで300個近くありますので、広さとしても千軒という名に値するだけの規模がありました。

1年目は、全体の規模を確認するため、測量調査が中心でした。測量は1年で終わらず、3年目までかけて行いました。鬱蒼とした山の中なので、測量はとにかく大変でした。

ここは多摩川の源流で東京都の上水道の起点になっているため、立ち入りが制限されている区域です。そのため調査についても、調査面積の制限などいくつか制約がありました。

私が汗と泥にまみれて発掘に従事したのは、この発掘調査が最後となり、その後4半世紀が経過してしまいました。

<考古学と文献史学の学際的研究>

しかし今回この講演でこの発掘調査についてとりあげるのは、けっして私の個人的な思い出を皆様にご披露したいからではございません。

今回演題にいただきました考古学と文献史学の協働研究として、まれにみる成功例で、この調査後、考古学と文献史学の学際的研究というものを数多くみてきましたが、この黒川金山の調査より切れ味のよい研究をみたことがありません。

学際的な研究を行なうためには、その遺跡に関する文献史料が残っていなければなりません。黒川金山に関しては、豊富とまではいえませんが、さまざまな史料が残っておりました。皮肉なことに、興味深い発掘調査の資料が出たところには、

文献史料が残っておらず、逆に文献史料がある程度残っているところで調査を行ってみると、なかなか考古学的な好資料が出土しないことが多いのです。

その点、黒川金山の場合には、周辺地域の古文書調査でもたいへんよい成果が得られたのです。

<深沢城攻めにみる金山衆>

黒川金山の金掘を金山衆といいます。この金山衆の末裔が何軒か金山周辺に残っています。それぞれの家が、戦国時代武田氏の時代からの文書を持っており、これ自体が稀有な例なのです。

1571（元亀2）年の武田氏朱印状では、田辺四郎左衛門尉という金山衆に「深沢城で手柄をたてたので、褒美をあたえる」という内容が書かれています。

深沢城は、甲斐の武田氏と小田原の北条氏が奪い合いをしていた城で、1571（元亀2）年の時点では、北条側が押さえていました。北条が押さえていた城を武田側が攻めたという図式で、この時、深沢城を守っていたのは、北条綱成という武将でした。

では、金山衆がどのような手柄をたてたのかというと、敵方北条側の手紙に残っています。

1571（元亀2）年正月20日上杉謙信・景虎宛北条氏政書状に、「敵、武田勢は金掘を導入して、城の間近まで掘り崩してしまった。そこで城主の一存で城を明け渡してしまったのです」とあります。北条氏政が同盟軍である上杉謙信に詫びを入れている様子が描かれており、私ではなく城主が勝手に城を明け渡してしまったという主張をしています。

金山衆が掘削技術を生かした特殊工作隊として活躍していたことがわかります。

<引間城攻めにみる安倍山の金掘>

このような例は、『宗長手記』に残る1516（永正13）年8月、今川氏親の遠江国引間城攻めの史料にもみられます。

今川氏親が浜松市にある引間城を攻め入った時に「安倍金山の金掘を使って、敵の城の水脈を掘

りぬいて、井戸を枯らしてしまった」という記述があります。

安倍金山は、元々今川氏の所有でしたが、今川氏が滅亡してから、武田氏の所有となった金山で、金の質が黒川金山のそれとよく似ています。

この史料からは、この時期に金掘が戦に駆り出されていたことがわかるほか、露天掘りだけでなく、坑道掘りを始めていたこともわかります。

<金山衆とは>

では、金山衆とはどのような人達かという、江戸時代の金掘人夫よりは、山師クラスの経営者のイメージです。苗字を名乗っておりますので、侍身分です。ちょうど武田軍の下級家臣クラスの待遇だったようで、鉱山で培った掘削という特殊技術をもって従軍していたようですが、江戸時代になると、子孫たちの身分は武士と百姓の間くらいにあたる郷土に留まりました。

<武田勝頼朱印状>

1577（天正5）年の武田勝頼朱印状には、「金山において黄金が出なくなった」という内容が書かれており、勝頼の代には、すでに金山が衰退していたことがわかります。

先の文書は、鉱山の様子ではなく、金山衆が戦で活躍していたことを伝えるものでしたので、この朱印状が鉱山の様子を伝える最初の文書です。

現存する最古の文書には、すでに金山が衰退しているということしか記されておりません。文書から分かるのは、衰退期に入ってからで、最盛期の文書は現存しません。ここで考古学の出番がやってきます。

<考古学からみた黒川金山>

遺跡の中央部、縁辺部、それぞれのエリアで出てくる遺物の年代が異なります。

遺跡の中央部で出土するのは、戦国時代から江戸時代にかけての、岐阜県美濃焼の編年で大窯のⅠ、Ⅱ期（15世紀の後半から16世紀の後半）のもの、さらに17世紀の中頃まで下りそうな美濃焼や瀬戸焼、肥前陶器が出土しています。残存してい

る遺物の年代幅が広いといえます。

地上から観察される坑口はこのあたりにしかみつかっておりません。

それに対して、遺跡の縁辺部は、美濃大窯Ⅰ期（15世紀後半から16世紀中葉）の遺物が中心で、それより時期の下るものは少ない。周辺で見ついている遺構は、鉱山が最大規模に拡大した時のものだと考えられます。

そこから推察すると、最盛期は、武田信玄の時代か、あるいはその父、武田信虎の時代であったのではないかと推察されます。我々が推定していた時期よりかなり早いことがわかってきました。

<遺物からわかったこと>

遺跡の谷部分から石臼が多く見つかりました。軸受けの穴が開いていないタイプのもので、穴の開いていない方が古いタイプだと考えられています。

小さなかわらけに金が付着しているものも出土しております。かわらけを使って精錬を行った痕のようです。

産業遺物と生活遺物が混在してみつかっています。江戸時代の鉱山が組織的な空間利用をしているのに対して、戦国時代は、作業空間と居住空間が混在していたわけです。

自立性の強い金山衆が、それぞれ平場に展開し、独立経営していたことがわかります。

<選別法と鉱石の純度>

かわらけなどに付着している金鉱石を分析してみると、非常に純度が高い。遺跡には鉱石がころがっているのですが、金の粒が肉眼で確認できるほどです。

1533年に朝鮮から灰吹法という精錬技術が伝わります。石見銀山は、この技法が伝わったことにより、産出量が大幅に増えることになりました。灰吹法を行うと鉛が検出されるのですが、この金山の資料を4点分析してみると鉛が検出されませんでした。

純度が高いので、かならずしも精錬を行う必要がなく、鉱石を破碎して、あとは砂金をより分け

る要領で作業を行っていたようです。

金の純度が高く、高度な精錬技術が必要なかったことが、東日本の金山が早くから拓けた原因だったと考えられます。また、遺跡に残る雑居状態も同じく高度な技術を利用していなかった証拠といえます。

<黒川金山の衰退期>

古文書から見ると、先ほども申しましたように、1577（天正5）年にはもう「金山において黄金が出なくなった」という状況になっていました。

ところが考古学的にみると、遺物の出土状況から鉾山町の中央付近に17世紀半ばくらいまでは、人々が逗留していたことがわかります。

この内容は、現地の植生、樹齢からも類推することができます。実は、現地には植物学者の方にも来ていただき、確認してもらったのですが、樹齢300年くらいの木々が多くみられたのです。

今は鬱蒼とした森林でも、鉾山を営んでいた頃には、禿山だったわけです。考古学的な要素と、植生的な要素からは、17世紀半ばまで人が住んでいたことがわかります。

<延宝2年泉水谷山論裁定図>

同じことは1674（延宝2）年に描かれた『泉水谷山論裁定図』という絵図からも確認することができます。

これは黒川金山近辺の村の境争いに関連して書かれたものですが、そこにたまたま黒川付近の様子も描かれていたのです。それによれば黒川付近ははげ山で、家が3軒ほど描かれています。

遺物の年代、植生、絵図の3つの素材が、同じ結論を示したわけです。

<周辺金山への移住と出職>

金山衆の足取りについて、文献からどのようなことがいえるのか。黒川金山から近隣の鉾山へと少しずつ離散していったことが窺えます。

信州川上村の梓山・川端下金山へは1597（慶長2）年ごろから1617（元和3）年ごろまでの20年間に移住や出職をしていました。

都留郡丹波山村の丹波山金山へは1594（文禄3）年以前から、竜喰・牛王院平金山へも1594（文禄3）年以前から移住が始まっていますが、これらの金山は、どのくらい続いたのか、よくわかりません。

<丹波山金山への移住>

丹波山金山への移住には、別の興味深い文献が残っています。

それが年月日欠「覚」（「清水利氏所蔵文書」という文書で、1634（寛永11）年に行われた上野原用水普請に参加した金掘の名簿です。この工事に土木技術を生かして、金掘達が参加していたことがわかります。

名簿は2つに分かれています。一つは、「丹波山村内舟越」16名、同「入やまめ沢」1名（依田姓5名・保科姓1名）。この苗字は、黒川金山と共通するもので、黒川からの移住組である可能性が高い。もうひとつが、「黒川より舟越へ罷り出で金掘申し候者」12名（保科姓1名・古屋姓2名）。

黒川から舟越に完全に移住した者と、黒川に居住しながら舟越へ通っていた者、つまり黒川廃鉾後も旧鉾山町に居住しつづけていた者の2つのタイプがいたわけです。

<二通の採掘願（「広瀬四郎家文書」）>

もう一つ大きな移住先としては、埼玉県秩父の股野沢金山があげられます。股野沢金山の採掘に関しては、2通の採掘願が残されています。

1通は、1640（寛永17）年霜月22日の採掘願写で、甲州黒川の金子伝左衛門以下5名が連署しており、もう一通は、1648（慶安元）年6月吉日の採掘願で、甲州黒川の角左衛門以下14名が連署しています。慶安の方は正文（原本）です。寛永の方は、写になっています。寛永の方までは、苗字も名乗っていますが、慶安の方には、名前だけしかありません。

採掘願の内容は、1640（寛永17）年のものが、「武州秩父の股野沢金山か、出羽の延沢銀山を掘らせてほしい」というもの。出羽の延沢銀山は、山形県の尾花沢市にあります。現在は、銀山温泉

として有名です。

この文書には、我々は、股野沢金山を発見し、3年間採掘してきたのに、1635（寛永12）年に延沢銀山が留山となったのに伴い、股野沢金山も留山になってしまったとあります。

でも1640（寛永17）年10月に延沢銀山の留山が解除されたので、股野沢金山の操業も再開させてほしいというのが寛永の採掘願の趣旨です。

採掘願が出されたのは、1640年（寛永17）11月で、延沢銀山が操業を再開した1か月後。わずか1か月で、なぜこの情報が入手できたのか。

伊丹康勝という、のちに幕府勘定頭になる、当時は延沢銀山上使、甲府城代がおりました。

金山衆の子孫には、金掘にとどまった者や、他の職業に転職した者など、いろいろみられました。その一人田辺市郎左衛門は、伊丹氏の領地の収納代官になりました。どうやら、この人が情報源だったようです。寛永の採掘願も伊丹氏の陣屋へ出されたものと考えられます。

それでは、結果はどうだったのかということになりますが、残念ながら寛永の採掘願はまだ飢饉が続いているのでダメだということで、却下されてしまったようです。

<慶安の採掘願>

飢饉が収まってきた1648（慶安元）年に再挑戦したのが、慶安の採掘願です。

慶安と寛永の採掘願には、いろいろと違いがあります。寛永のものは、股野沢金山と延沢銀山の両方を願い出していますが、慶安のものは、股野沢金山に絞っています。

慶安の採掘願では、連署している人たちの苗字がなくなっています。寛永の段階では、まだかろうじて侍身分であることを主張できた。彼らは武田氏からも朱印状をもらいましたが、武田氏が滅んだ後は、徳川氏からも朱印状をもらっています。徳川家康から朱印状をもらったのだから、徳川の家臣だという誇りを持っていたのでした。

金山は、自分たちが独占してもよいのだが、一部は他の金掘にわけてやってもよい、という、少し高飛車な文章を記しています。

慶安になると、そのような誇りはなくなっているようです。署名から苗字も消えました。

慶安の採掘願の結果は、よくわかりません。この願は原本のようなので、もしかすると提出自体もしていなかったのかもしれませんが。これらの文書が、黒川の地名を冠して発せられた最後の文書ということになります。発掘調査から、17世紀半ばくらいに遺跡が廃絶したことがわかっていますから、慶安の採掘願に名を連ねた人たちが、最後まで黒川にとどまった金掘達ということになるでしょう。

<一之瀬高橋への移住>

では最後まで黒川にとどまった金掘達は、どこへ移り住んでいったかということになりますが、一之瀬高橋という集落へ移動したようです。

この集落は、黒川の地にくらべ、とくに開けているというわけでもありません。同じような山の中に移住した理由がわかりますか？

おそらく股野沢金山再開に一縷の望みを持っていたために、そこに通じるこの地を選んだと推測されます。

一之瀬高橋は、畑作などを営む山村でした。黒川は完全に廃絶してしまいましたが、一之瀬高橋は、細々と集落を営みながら現在に至っています。

現在は土地を離れてしまいましたが、一之瀬高橋の庄屋を務めていた田辺源吾家に残された文書があります。それが年月日未詳文書雛形（「田辺源吾家文書」）で、そこに「市野瀬高橋百姓之始り、明暦年中ニ始り……」とあり、一之瀬高橋集落の起源を明暦年間（1655～58）としています。

先ほどの絵図（延宝2年泉水谷山論裁定図）には3軒人家が描かれていましたが、廃屋の可能性もあり、この時点ではもはや鉾山町と呼べるような状態ではなかったことがわかります。

こうして、繁栄を極めた黒川金山も、17世紀半ばには廃絶したのでした。

<黒川金山調査の意義>

黒川金山調査における最大の成果は、考古学の成果と文献史学の成果がうまく補完しあった点で

す。一つの金山の歴史をかなり克明に調べ上げることができたといえます。

特に黒川金山が文献史料に登場するのは衰退期に入ってからで、金山から鉱石が出なくなるという記録からスタートします。最盛期の状況は、文献史料からは全く知りえない。そこが現地の発掘調査によって、経営の実態や最盛期の様子なども復元することができました。

<この調査の方法論上の意義>

この調査の方法論上の意義としては、考古学的な調査と文献史的な調査が、最終段階に至るまで互いに独立して行われたことです。途中でのすりあわせなどはしませんでした。

この点については学際的な調査なのだから、途中でいろいろな議論した方が良いのではないかと、という意見もあろうかと思いますが、私は、この方法論の独立性こそが、学際的研究の一番大切なところだと考えています。この点については、考古学の黎明期にすでに浜田耕作がそのように提唱していました。これと同じことは、文献史学からの手法にもいえます。

なぜ、最終段階まで成果のすりあわせをしてはいけなかったのかといえば、検証ができないからです。それではあやまりを起こした時に、責任の所在といますか、原因がどこにあるのかわからなくなってしまう。

途中ですりあわせをすれば、ぶつかりあいもないので、あやまりに気づかないまま、予定調和的な結論が出されておしまいになる危険性もある。

黒川金山の調査で誇るべきことは、考古学と文献史学が独立に進めた調査が、最後の答え合わせでみごとに一致した点にあります。

これまで数多くの学際的研究をみてきましたが、その鮮やかさにおいて、この調査を上回る成果はないと、自負しています。

ただし調査の結論は、かならずしも一度で一致しなくてもよいのです。黒川金山の調査は、一度で一致したわけですが、一致しない場合には、それぞれが持ち帰って、それぞれの研究手法から検証して、間違いがないか確認していく。この際に、

方法論の独立性が大切になるのです。結論を導くときに、「この結論はどこから導いたものだっただろうか？」という点が曖昧になることを避けるためには、最後の段階ですりあわせということが非常に大切になるのです。

私が中世考古学になかなか戻れないでいることを最初に申しましたが、この調査の成果の大きさが逆にハードルを非常に高いところまで押し上げてしまった面もあるかもしれません。

恩師の石井進先生には、私に中世考古学をやりたいという気持ちがあったのだと思いますが、いまだに期待に背いたままで、心苦しいところがあります。この間、もっぱら文献史料だけで研究を進めてきたわけですから。

ところが近年になって、たまたま考古学の必要性を痛感する場面にいくつか遭遇しましたので、そのことをお話ししたいと思います。

<貨幣史の謎>

私はいくつか研究テーマを持っているのですが、その一つに貨幣史の研究があります。

貨幣史の謎の一つに、12世紀の半ばくらいから中国から輸入された中国銭が貨幣として利用されますが、なぜ中国銭が日本にやってきたのかわからないのです。

<日本古代から中世の貨幣>

それまでの日本の貨幣史はどうだったかというと、古代には富本銭に始まり、全部で13種類の自前の銅銭がつくられました。これが10世紀後半に途絶えてしまいます。そのあとは、絹や米の現物を貨幣の代わりにしていました。

そして、12世紀のなかば、1150年代に入り、中国の王朝、北宋が鑄造した銭を中心とする中国から輸入した銭（渡来銭）が突然、流通するようになりました。一気に中国銭を利用した貨幣経済が始まります。この状況は、江戸幕府が寛永通宝を鑄造するようになるまで、約500年間続いたのです。しかし最初の中国銭がどうして日本に輸入されたのかが大きな謎なのです。

<平清盛の日宋貿易>

よくいわれている説は、平清盛が政治的にだけでなく、経済的にも日本を支配する目的で、日宋貿易により、日本に銭を輸入したのだというものです。この説明は、中国銭がすでに貨幣として流通していたのであれば、受け入れ素地ができているところに大量に輸入するわけですから、わからなくもありません。

しかし、最初の中国銭は、そのような地盤がないところに入ってきたわけです。絹や米が貨幣代わりになっていたわけですから、突然中国銭を持ってきても、それを貨幣として受け入れてもらえるか保証がない。非常にリスクが高いわけです。

そこで最初の中国銭がなぜ、どのように入ってきたのかが大きな謎になっているのです。

<経筒等の銅製品に含まれる鉛同位体比分析>

そうした中で、別府大学グループ（飯沼賢司・平尾良光氏ら）が、非常に注目すべき研究を進めています。

同グループは、摂関期から院政期に流行した、お経を入れて山に埋納する経筒などの銅製品に含まれる鉛同位体比を測定しました。

その結果、12世紀前半までは日本産の銅を材料としていましたが、12世紀半ば頃、日本産銅から中国華南産銅へ変化することが明快に証明されたのです。中国華南産銅とは何かというと、それが中国銭ということになるわけです。

12世紀といえば、院政期で寺院建設ラッシュの時期でした。経筒もそうですが、お寺の梵鐘など、多くの仏具が製造された時期です。ですから、材料としての銅が多く必要になり、そのような中で中国銭は、貨幣ではなく、銅の材料（インゴット）として輸入されたのではないか。銅の材料としての輸入であれば、先ほど指摘したリスクはありません。この説は、基本的に認めてよいのではないかと、私は考えています。

<南宋による高麗・日本への銅銭流出禁止令>

日本から見れば流入ですが、中国から見れば流出です。自国の貨幣として、鑄造しているにもかかわらず、どんどん日本へ持ち出されてしまう。

そこで南宋から高麗・日本への銅銭流出を防ぐ法令がたびたび出されています。「高麗・日本の商旅の銅銭を博易するを禁ず。」（『統編両朝綱目備要』巻五 慶元5年〈1199〉7月甲寅条）のように、高麗と日本を名指しで禁止しているのです。

日本については、上記の状況からみてわかるのですが、問題が残るのは、高麗の方です。高麗と次の朝鮮もそうですが、中国銭が流通しませんでした。これもまた貨幣史の謎なのですが、にもかかわらず、銅銭の流出先として、日本とともに高麗が名指しされている。それはなぜなのだろうか。

高麗では、銀と麻が貨幣の代わりになっていました。高額取引には銀を利用し、小額取引には麻布を利用していたのです。朝鮮では、高額取引には銀を利用し、小額取引には木綿を利用していました。

<研究法の応用>

そこで別府大の研究成果が、高麗にも応用できるのであれば、この謎も氷解するのです。

日本では最初銅材料として輸入していた中国銭が、のちに貨幣として輸入されるようになったのに対して、高麗では一貫して銅材料として輸入されつづけていたと考えてはどうでしょう。それを証明するには、どのようにしたらよいかということになりますが、別府大が行った分析を高麗の仏具に対しても行ってみれば、一目瞭然の結果が出ると思います。12、13世紀くらいの高麗の仏具を分析してみて、もし中国銭と同じ成分が検出されれば、この仮説が証明されることになります。

<学際的研究進展の可能性>

貨幣史は、近年中世史の中でも活発に研究されている分野の一つなのですが、残念ながら文献史料に恵まれない分野です。だから逆に、研究の当初から、考古学と手を携えて調査が進められてきました。その意味で、貨幣史は考古学と文献史学が学際的研究を行っていくことに向いている分野といえます。銭以外の金属器も含め、この分野では、今後ますます学際的研究が力を発揮することでしょう。

北海道立埋蔵文化財センター年報17

平成27（2015）年度

平成28年4月30日発行

編集：公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

発行：北海道立埋蔵文化財センター

〒069-0832 北海道江別市西野幌685-1

Tel：(011)386-3231 Fax：(011)386-3238

E-mail：mail@domaibun.or.jp

URL <http://www.domaibun.or.jp/>

印刷：社会福祉法人 北海道リハビリ

〒061-1195 北広島市西の里507番地1

Tel：(011)375-2116(代) Fax：(011)375-2115
